



No. 129  
1982年8月刊  
研究会局  
村務社会研究会  
中央大学文学部研究室  
八王子市東中野742-1  
(0426)74-3841

六月五日（土）、神田学士会館で、座談会『村落社会研究会三〇周年に当たつて』がもたれた。本号は、この座談会に、既に数名の会員から寄せられている「村研三〇年の歩みのなかで」の感想をあわせて特集とした。

## 特集 I

### 座談会

#### 「村落社会研究会

#### 三〇周年に当たつて」

事務局、では、これから座談会を開かせて頂きます。私、事務局としてこれまで、運営委員会・実行委員会とともに、三〇周年の準備を進めて参りましたが、やはり諸先生方による座談会をもつて以前のことを是非お聞きしたいという要望が出て、企画した次第ですが、本日は諸先生、大変お忙しいところを、時間割いて頂きまして本当に有難う御座います。今日は、会発足当初からのことを思い出しながら、ゆっくりと御話いただきたいと思います。そして、最後に、今後の展望みたいなものにもおふれいただいて、私たちそれを『研究通信』で会員にお知らせし、実りある三〇周年の大会を迎えると考えておりますので、宜しくお願ひ致します。では、これらは司会の三人の先生に……。

高山 それでは司会の口火を切るということで……。お手紙さしあげましたように、座談会では、村研発足時の経緯と状況、それから村研と各先生とのかかわり、農村の現状をどうご覧になつてゐるのか、村研三十年の評価と今後の課題ということで、これは大ざっぱな柱でございますが、私たちいたしましては、相談いたしました時に、村研発足時の経緯は経緯でございますが、そこのところで村落社会研究をしなければならないというふうにお考えになつた当時の問題意識、一番中心的に先生方がお集まりになつて、何を考えて村落社会研究というものをしなければいけないというふうにお考えになつたのか、その辺からまずお話を始めてい

ただきたいと考えておる次第でございます。

福武 いま司会のお話で、どういう意図でと言わると困るんです  
が、経緯を多少申しますと、こうしたことにならうかと思うんで  
す。

戦後、人文科学委員会というのがあって、山田盛太郎さんが親玉や、文部省のお金で封建遺制というのをやつたりしたわけです。その段階で文部省から金が出なくなつて、日本人文学学会といふのができちやつたわけですよ。古い方は思い起こされると、うけれども、尾高朝雄さんが親玉になつて、あの方はユネスコとの関係があつたものだから、ソーシャル・テンション（『社会的緊張の研究』）をやろうということになつて、それぞれの分野で同じような問題を取り上げてやろうじゃないかということで、農村の方もやれという声がかかつたわけです。それで有賀さんを親玉にしまして、こちらにいらっしゃる小池さん、内山君なんかもそのメンバーなんですが、最初、桜井さんが住んでいる茨城県の恋瀬というところで調査をやりまして、これが一九五一年度、それから一九五二年度、実際に調査やつたのは四月ですけれども西塩田村を扱う。さらに一九五三年度、これも実際に調査したのは、ギリギリの一九五四年度になつたんですが、鶴岡近郊の大泉の調査をやる。

そういう経過が一方にございまして、もう一つは余り正確でないんですけども、SSM調査というのが、日本社会学会で行われたわけですが、本会の方は、ロックフェラーから金をもらつて

やるということだったわけです。それが終わった後、農村のSSMをやろうということになりまして、実際に行われたのは五四年、五五年なんです。

そういう相談があつたというのが一つの背景になるんじゃなかろうかと思うんですが、そういうつながりで調査をやつているうちに、村落研究の学会つくろうじゃないかという話になつて五二年、学会（社会学会）、その時私、庶務理事ということになつたのですが、確かにその学会は教育大学で行われたと思うんです。その教育大学での学会の後、十一月頃に、その時村研と、名前まで決まつていたわけじゃないんですけども、そういう学会めいたものをつくろうということになりました。それで準備が進んだわけです。

農村のSSMというのが実際に行われたのは、先ほど申しましたように五四年、五五年なんですけれども、その前に文部省の科学研究費を、ということで、実際にこの相談を始めた頃に構想したのは、一つグループとして福岡であつたんです。関西の方で和歌山をやつて、関東の方は甲府の郊外の、これは大変おもしろかった村なんですねけれども、結局何もまとまりませんでした。そういうつながりで声がかけられた、それからその当時の長老の人の名前を並べてもらつたということではないでしょうか。それできて、あと中村さんに入つてくださいということで引っ張り込んだと思うんですが、発起人というのを見ますと、社会学なんですね。

小池 テンション調査と村研とは直接につながりはないでしょうね。

福武 直接につながりはない。つながりはないんですけども、社会

学会の方でやろうじゃないかというので広げたのは、まさにテンション調査のつながりだろうというふうに私は思っているんです。

小池 なぜ村落社会といふものをしてしまうということになつたんですか。

小池 実は、僕はいまだにそれにひつかかるんですがね。なぜ村落社会をその時にやらなければいけなかつたのか。

福武 当時村落社会がこういう課題を抱えて、これを解明するためやろうというのではなくて、仲間をつくり上げてやろうじゃないかという……。

小池 有賀さんは何かあつたんじゃないでしょうかね。

福武 最初の頃に取り上げたのを思い起こしますと、特にこういうことを、という共通の目的意識があつたとは思えないんだけど、とにかく村を勉強している連中で集まつて学会をつくる。つくるに当たっては、最初、今までどういうことをやつたかというのを顧みてみよう。そして、その当時は農地改革後ですから、農地改革というものによってどういうことになつてるかというのを見ようというような、そういうくらいの共通意識があつたと思うんですけれども。

安藤子 封建遺制といいますと、何か否定されるべきものというか、

戦後の民主主義日本にとつては何となく悪いもので、そういうものをなくさなければいけないという、農地改革なんかの時もそういう考え方があるわけですね。そういうつながりで村研ができると

いうことはないわけですね。つまり古いものだからこれは否定しないでいいという——。

福武 いや、別にそういう農村に対する見方を何か共通にして、研究会つくったということじゃないように思いますけどね。

中村 ないだらうな。

内山 今朝、これはいけないと思つて、年報第一巻の有賀先生のあとがきがあるでしよう、あれをあわてて読んできました。そ

うしたらやっぱりそこの中に有賀先生は、いま安孫子さんがおつしゃつたように、農村の封建遺制云々といふんじゃなくて、農村の民主化ということを出しておられたんですよ。農村の民主化と

いうのは、当時の日本の第一級の問題だったでしよう。食糧増産ほかあるけれども、その農村の民主化ということに向かつて、各分野で農村の民主化について始めて一始めてと書いてあつたか

それはあやしいですが、農村社会の問題が、いわば国の第一級の問題として提起された、そういうことで農村社会の民主化といふことで、経済学も法律も民族学も、全部結集したんだというご趣旨のことを、有賀先生が書いておられる。そういう当時の状況一二八年といふともうそろそろ、やや民主化のローソクの最後の輝きの頃ですからね、おくればせながらだけれどもそんなことで

だから、いま福武さんおつしゃつたように、いろんなテンション調査その他もあるけれど、それからそういう学会だけじゃなくて、もう少し広い、たとえば農林省も福武さんご存じのとおり、

農政渗透調査が……、今朝それを見てきたんだ。やはり二十八年すよね。農林省自身も行政の方も関心を持ち、農村の方も、ご承知のように復員の兵隊、あるいは街から帰つてきた、工場から帰つてきた若い人たちを中心に民主化運動が起つてきている。農林省も一生懸命だ、國の第一級のボリシーでもある、学会でももちろん関心を持つというような、いまの四面楚歌と違つて、あの時は四面花なんだな。そういう中であらゆる社会学——イニシアチブとつたのは社会学なんでしょうけれども、第一級の課題なんだから、各分野の方々がおのずから集まるような土台があつたと、こ<sup>う</sup>僕は今朝読んできただけれどもね。有賀先生が第一巻の年報の中に書いていらっしゃる。

### 高山 ここにある『村落研究の成果と課題』の後記のところで、い

ま内山先生がおつしやつたように、やはり「占領軍によつて敢行された法律や制度の上の重大な変化とともに、生活の変化も目立つてきつたが、この変革に盛られた民主主義への要請が、外的にも内的にも激烈になつてきつたことは、敗戦の深刻な経験を通して、日本及び日本人に対する痛烈な認識を要求してきたからにはならない。村落研究もこういう機運の一環となつた」——「こういふなんですが、やはり民主主義の問題でござりますかね。」

福武 そんなに強烈といふものはなかつたようと思つんですが、それよりもむしろこっちの方へ『研究通信』一号所収の「村落社会研究会の発足にあたり」は非常に素直で、それはちょっとかづ

こつけて……（笑）。「生活や経験や考え方の異なる人々が相接することにより……」という。

中村 その点は、僕はそのとおりだと思う。誘いにきたのがもつつけの幸いに、仲間に入つたみたいなことなんで、私自身はこの第一回の時の説明でもやつたのが、後に煙山でまとめたの中間報告です。つまりそういうことを私は仙台でやつていたわけです。ですから、東京で人文科学がどうの、民主化がどうの、封建遺制がどうのなんていうことと一切関係なしに、経済史として僕は農村やつてましたから。ところが農村にならないんで、農政にしかならない。それで、有賀喜左衛門というの、僕の子供の時から常に接触していましたから、よくその話をしてくれておつたんで、

それで彼が村をやるために「おまえは農村のフィールドへ出てやらないんじやないか」と文句言われたわけなんで。そう言われたつてやたらにできるものじやないということを言つてゐるうちに、戦争から帰つてきた連中が、優秀なやつがいっぱい帰つてきて、学問をしたいという連中や、熱意に燃えてる連中が参つて、それならということで、この煙山の調査を始めたわけなんです。

その時に、一方で九学会、ああいう総合研究というようなものが、はやり言葉みたいにあつたね。ところが、あれは総合にはならないんで、個人がやつてるだけで、ただデパートみたいにたくさんあるというだけで、本当に総合じやないじやないか。われわれのところは学者の集まりじやなくて、まだ大学院、あるいは学生なんだけれども、本当の総合をやりたいという気持ちは、非常

に強かつたわけなんです。そこへ社会学の方で、いまおっしゃつたような、どういう起源がもとになつてゐるか知りませんけれども、

「おまえの方でも一緒に討論の中に入つてやらないか」ということを有賀氏に言つて、「それはよろしい、一緒にやりましょう。

本当の総合研究をやりましょう」というようなことで、すぐ応じたわけです。いささか軽率だったかも知れぬけれども、向こうでそういう氣を持つてやつていた時だったものだから、それと、

実際に実態調査やつて成果がどんどん上がつてくるし、おもしろいし、少し氣負つていた意見もあって、引きずり込まれたんなら、それを今度おれの方で乗つ取つてやろうというくらいの意気込みがあつたかも知れないんですけども、それで入つていつたんで、第一の目標は、やはりいろんな人がともども相互に討論し合つていくという、そこを強く彼は言つてきたように思いますし、私の意図もそこに一番あつたように思ひますね。

高山 そういう点では、小池先生も有賀先生から呼びかけられたといふことでございましたが……

小池 横はこれ見ますと、第一回、二回は出でていません。なぜ出てないかといいますと、ちょうどこの時は日本にいなかつたわけですよ。そして第三回の毎日新聞の大坂本社でやつた時に報告をしろということで、それで過剰人口の問題をやつたわけですね。ですから、この辺のところですね。こういう村落社会研究会といふものがあるんで、過剰人口の問題を報告しないかということが、誘われた第一のきっかけですね。

中村 社会というのは、ちょっとわれわれに魅力的だつたんだな。

いろいろのことを知らないものだから、知つてしまえば……(笑)。

それで、個人的に僕は有賀氏とよくしゃべり合つていたんですけれどね。社会構造というようなことを考えなさやだめだということで、僕は農政史ということを、百姓一揆だと土一揆みたいなことばかりをやつてたものだから、農民が出てこない。それはやはり村落の中で出てくるんだからということで——。ところが彼は、それで社会形態学ということを言い出してたことがあります。それをわしが経済史でもつて血を流してやる。中へ入れてやる。これだけじゃしようがない。そんなことを冗談めいたような言ひ方で言い合つたことがあるんです。そういうこともあって、ここで社会学の諸君が農村といふものにしぼつた、同好の人たちが集まって、村落社会の旗上げをするからといふのに、きわめて自然に合流する気になつたということと、もう一つ、第一回が仙台だつたということですね。これは偶然ですけれども、仙台であつたものだから、別にどういう主張をする、だれが主張するというとなしに、昔の仲間全部が同時に参加てきて、そこでご記憶の方もあると思いますが、勝手気ままな放言を盛んにやらかしたような次第ですね。これは一つの偶然ですけれども、しかしこれも重要な要素だつたと思います。

安藤子 確かに第一回大会の雰囲気というのは、いまおっしゃつた

協力というか、協同というか、いろんな違ったことをやってこられた方々が、とにかく同じ土俵に入つてやるんだという。そういう熱気みたいなものは非常にありましたね。私も卒業したばかりの頃で、右も左もわからなかつたんですけど、あの雰囲気だけは非常に印象に残つてるんです。一回目は確か内山先生ご報告なさつたんじゃないですか。

内山 いや、私じゃございませんで、森住（伍郎）という、亡くなりましたが……。おもしろかつたですね。学会でみんなおもしろい学会、なかつたですね。後にも先にも……。

中村 そんな感じがしますね。あの頃のいろんな学会で、みんな雰囲気の学会というものは、ちょっとなかつたですよね。

内山 何で中村先生は、あんなにおもしろくなつたんですか、仙台ということがあつたし、有賀先生や中村先生、皆さん方のお人柄はもちろんあつたけれど、いま仮に有賀先生が五十歳、中村先生が四十八歳ということと、さて、というふうになると、ああならないんじゃないでしょうか。お人柄つて、何か――。

中村 しかしあの時期、総合しなきやならないというのは、さつきもちよつと申しましたけれども、九学会連合とか、一種の流行みたいのがあつたんじゃないですか。

福武 学際的な共同調査、そういう雰囲気が……。会則にも共同調査というのが出てますからね。意図的には、それはかなりあつたでしょうね。

中村 みんなの気持ちの底にあつたんじゃないでしょうかね。それ

で、村落という自分の身近な問題でそれをやれるかという期待と、いうか、そういうことも熱気を呼びさせたんじゃないんでしょうかな。

内山 いま中村先生のおっしゃつたことで気がついたんですけども、農地改革とか、民主化とか、そういう社会的な情勢、これはもちろん状況として、あつたとしても、そのもとになつたのは、昔から村落やつてこられたといふのは個人的な衝動だったといふ——言葉は悪いんですけど、お話をあつたんです。そういうふうにおっしゃられてみると、僕自身も福武先生その他に引きずり込まれた——実は僕の方がお願いしたみたいな形で入れていただいたような始末なんです。もともとから考えてみてやはり、私は農業経済出身で、アマチュアのソシオロジストですから、とにかく農業経済にいながら、当時の農業経済はもう東畑先生その他が中心になられて純粹経済学の方に——マルキシズムならまだよかつたんでしようけれども。純粹経済学の方に偏つていて、経済学の講義が微分・積分というふうになつちやつていたからおもしろくありませんで、経済学はディズマール・サイエンスだということで、文学部の学生よりも熱心に聞きましたし、尾高さんの第一回の職業社会学の講義も聞いたとか、仏教が好きだったから仏教、哲学——文学部の学生みたいなものだったんです。そういうことで、社会

社会学にアマチュアとしてあこがれを持っていたというふうだったと思います。

そういう個人的な衝動があつて、先ほどどなたかおっしゃったけれども、戦後ああいう状況の中で、いわば後から理屈をくつつけたということになるんでしょう。そういう状況の中で、僕の個人的な関心が皆さんのご縁で一緒になつていく。説明すればそういうふうになつたんじゃないかと思います。

いまの問題に飛んで悪いけれど、一体いまの村研、あるいはいまの大学の全体もそうですが、個人的な意味でおれは好きだとか、やつてるんだという、最も個人的な衝動で村研に来るということだが、やや乏しくなつたんじゃないか。仮に、いま農政の役に立つとか、最も露骨にいえば学位論文の一つの点数にするとか、前はもちろんそういうのはあつたにしても、個人的な関心の方が強くて、それが一齊に解放されたあの場面の中でワーッと噴き出していったという——これも後の説明になりますが、恐らくそれが第一回の仙台の大会の熱気のものにあつたエネルギーだったかもしれないという氣を、いま中村先生のお話を伺いながら思い出しているんです。

内藤 発足した当時、私はもうすでに九州に去つておりましたので、一応発起人の名前になつているかもしませんけれども、私の参加の度合いといふものは、ほかの先生方とちょっと違つていると思つわけなんです。ですから、その当時の情勢について私の受けとめ方というのは、地方から眺めたという視覚がかなり濃厚だから

ら、全体的に当ではまるかどうかわかりませんけれども、丁度、現在は“地方の時代”などという掛け声があるんだが、あれは空念仏で、発足した当時はまさに“地方の時代”であり、もつと端的に言うならば“農業の時代”であったと思うんです。食えなかつたんですからね。

私にとっては当時の農地改革というのが、非常に大きな農村の革命みたいに映つたわけなんです。ところが——これはちょっと差しさわりがあるかもしれません、その当時の農地改革の受けとめ方というものは、経済的な視点というものが非常に強く出てきて、あるいは分析の比較というのも経済学的であつたというふうに感じられたわけです。そこで、私は社会学ですから、そういう経済的メカニズムについて、そのとおりであるかどうかといふ疑念が、この会に参加させたバックであつたと思うわけです。

先生方がおっしゃつたとおり、各人それぞれ問題意識というものがついて、私自身は戦前から農村には興味なくて、漁村には興味あつたんです。だから、この会が“農村社会研究会”だつたら入らなかつたんですがね。有賀先生なんかが序文があとがきで整理して書いてあるけれども、多分多くの人は、それぞれの問題意識、あるいは関心に従つてこの会に参加したというところが性格じゃないかと思うわけなんです。そういうわけだから、インフォーマリティーというものがこの会の特徴であつて、早い話が会則はないし、会長もおらんし、ということは、そもそもそれの人の関心は、かなりバラバラなものであつて、いつかまとまるだ

もうぐらいいの安易な予想みたいなものじゃなかつたかと思うんですけれども、何分私は九州から眺めたという、斜に構えて見ていますから、この見方が当たつているかどうかわかりませんけれども、とにかく当時の状況というものは、そういうわけでえらく筋

…と言つては悪いけれども、確かにあるわけでしょう。そういう中で、村落社会ということになると、逆にこっちからいうと、えらくはつきりつかみやすいものに近づいたという感じはしましたね。

目立つたところのもののじゃなくて、筋目立つなれば強力なリーダーみたいなものがあつて、その人が中心になつてある方向を打ち出し、それに關して共鳴するという形ならば、一つのオーガニゼーションになるんだけれども、オーガニゼーションになつていないというところが、この会のミソである。それがたまたま仙台という場所を得て、いよいよインフォーマリティーな面が強く打ち出されてきた。（笑）ですからあの当時でいいますと、例えば、武田良三さんとか、あるいは新明先生は、会員かどうか知りませんが、仙台の時は出でおいでになつてゐる。曰井二尚といふ先生、この方も後で有力なメンバーになつていく。その辺も僕は何となく関心の度合い、あるいはバラエティーというか、かなりバラバラなものがあつて、あの当時は文字でおり農村の時代かもつといえは農業の時代ですものね。

小池 第五回からです。鳴子に泊まつたから、必然的に泊まり込みになつたわけです。

安豫子 第五回からです。鳴子に泊まつたから、必然的に泊まり込みです。

小池 この会の特徴も泊まり込みということがあるわけでしょう。これが一つの独特の雰囲気を醸し出して、研究会としてはそういう形でやるところは恐らくないでしょうね。これは、そういう意味ではやはり村落社会だと思うんですよ。（笑）

中村 これは福武さんに伺いたいんですけれども、農村としなくて村落としたでしよう。何かこれ、意識があつたのかしら。

小池 問題はそこなんですけれども、なぜ村落なのか。

福武 白井さんは初めから入つていないです。池田義祐は入つてます。

中村 いまのことに関連して言ひますと、われわれは社会学というものは非常に漠然としか知らなかつたわけですよね。いまも名前が出ましたけれども、新明さんだって社会学者でしよう。しかし農村なんていうものは問題意識がないわけだ。ああいう社会学…

…と言つては悪いけれども、確かにあるわけでしょう。そういう中で、村落社会ということになると、逆にこっちからいうと、えらくはつきりつかみやすいものに近づいたという感じはしましたね。

小池 第五回からです。鳴子に泊まつたから、必然的に泊まり込みになつたわけです。

安豫子 第五回からです。鳴子に泊まつたから、必然的に泊まり込みです。

小池 この会の特徴も泊まり込みということがあるわけでしょう。これが一つの独特の雰囲気を醸し出して、研究会としてはそういう形でやるところは恐らくないでしょうね。これは、そういう意味ではやはり村落社会だと思うんですよ。（笑）

中村 これは福武さんに伺いたいんですけれども、農村としなくて村落としたでしよう。何かこれ、意識があつたのかしら。

小池 問題はそこなんですけれども、なぜ村落なのか。

福武 初めから村落なんですよ。ただ、村落社会学会にするか、村落研究会にするか、村落社会研究会にするか、どれがいいだろうということを議論してるんですね。だけど、初めから農村にするか、村落にするかという、そういう意識なかつたですよ。それは私もよくわからないんだけど、やはり漁村の研究者というのを念頭に置いたんじゃないかなという気がするんですけどね。村の研究者を広くというか、初めからいろいろの専門分野の、という意識

があつたわけです。

中村 そうかもしだれないね。そうすれば、農業がなくなつても村落研究会はあるといふ……。

福武 いや、そこまでは……（笑）

小池 日本の社会をつかんでいく場合に、村というものが一つの基礎にあつて、村がつかなきいかん、村の集合体だという意識があつたんじゃないだろうか。

中村 しかしそういう概念規定みたいなことは余りやらなかつたね。福武 うん、やらないというか、農村という考え方なかつた。村落は確定している、その後、どうするかというのか、どれにしましょうかという議論ね。村でもいいんだけど、『村研究会』というのは……少し学会めいて村落と……

安原 たとえば福武先生の初めに出された『中國農村』、農村という表題ですけれど、村研に参加される時に、農村と村落とどちらが上でどちらがどうかという議論はどうですか。

福武 私は、一方においていろいろの専門分野の人が顔を合わすのがいいんだというそういう発想と、もう一つは広く村という意味で、農業村落には限定しないでという、そういう感じ方で村落だという感じがするんです。有賀さんも多分そうだろうと思うんですね。有賀さんが広くいろいろの人とやつた方がいいな、と思ったのはテンション調査だらうと思つたんです。

小池 それはそうでしょう。あの時に、いろいろの分野からの一つの村の調査というものが初めてできたでしょ。それまでは、社

会学なら社会学の連中だけが調査している、経済学なら経済学の連中だけが調査している。あの時に初めて有賀さんが、社会学も経済学も歴史学も集まつてやろうじゃないか。だから永原慶一君が入つてたですね。

安原 やはりいろいろの立場、いろいろの見方の違つた方々が集まつて、それぞれの問題意識として持ちながら勉強していく感じやないかという感じで、お互いに刺激を受けるという、こういう意味でのいい経験というのは、テンション調査ですね。

小池 そうだと思いますね。そういう意味ではつながりがある。また、僕がどうだと言われたのも、テンションのつながりでしよう。もっともその前から有賀先生は、慶應義塾の経済史学会へお越しただいたことがありましたけれども。

□

高山 そして、このこともお伺いしたいと思つたんですが、福武先生が中心になつて、『村落研究の成果と課題』という形で、最初の第一報をお出しになつて編集なさつていらっしゃるわけです。その時に、経済関係のところは小池先生がお書きになる予定になつていて。それがフランスへおいでになつたんで、大内先生にかわっておりますから――。

小池 それは、僕は記憶ないです。そういう交渉を受けたことは記憶ないです。

高山 それは別といたしまして、そういう中でこの『村落研究の成果と課題』という一番最初のを見ますと、やはり戦前からの研究

で、社会学、経済学、民族学、それから農山村という表現をとつて、そして村落構造、家族と分解して、今までの研究史を一応総括して、その次の今後の研究に資するという形で、最初はこれでございますね。まずこれから刊行物として出発したということ

で、これと実際の研究会のあり方は違つてゐるわけでございますね。小池 それは時潮社版はそうなんですよ。とにかく研究会で宿題を出して、それで報告しますね。その成果がそのまま年報に反映するという形ではなかつたわけです。年報の方は別に、その時々のテーマを決めて原稿を約束し、もちろん報告原稿も中には入りますけれども、直接にはつながりがない、こういう形だと思います。

高山 過剰人口の問題については、年報と報告が一年続いておりますけれども、一緒になつておりますね。

小池 時潮社の方から、今度は過剰人口にして出せということにならんですよ。ですから、もちろん報告されたものが中心になりますけれども、後の壇書房の時みたいに自由投稿原稿その他入れてあるということはないですね。

高山 これを見ておりますと、その後のことですけれども、もう一

つ『村落共同体の構造分析』で、今までいう年報ですが、こういふうにまとめる。これをまとめようというお考えをお持ちになつた経緯というのは、どういうことだつたんでございましょうか。これは、いま読んでも大変レベルの高い、非常におもしろい本でございますね。

福武 レベルが高くておもしろいかどうかそれは別として、これは

ベストセラーですぐなくなつたんですよ。すぐなくなつて、復刻するまでべらぼうに値段が高かつたんです。

中村 これで村研らしいものが出てたな、という感じがしたことは確かですね。

高山 ええ。僕は時潮社版ではこれが大変おもしろかったんじゃないかと思うんですが、これが出来るまでの間、こういう研究会は全然やつていらないわけでございますね。そうすると、こういうものと研究との関連がもう一つ、どうなつていながらこゝにまとめていつたんだろうか。一つの村研の中でみんなでやり合つてしながら、この辺にひとつ理論的にも整理しようということが出てきていたんじゃないのかという感じがするわけなんです。その辺のところが一。

中村 みんなが潜在的には腹の中に持つていていた問題を、一応さらけ出してみる、そんなことじゃないでしょうか。

福武 戦後の封建遺制などということを言つていた時の流れからいって地主制が云々ということで、残つてゐる、残つてないということで、しかし残つてゐるというのはいかにも無理になつてきて、それにもかかわらず農村は余り変わらないじゃないか、それで共同体という、そういう雰囲気が全般的にもあつたわけですよ。それで、村研がこんなことをやって、例外的にすぐ売れてなくなつたのは、そういう背景があつたからじゃないでしようか。

高山 ちょうど大塚さんの『共同体の基礎理論』が出た頃でもあつたわけですけれども、……

島崎 この間の編集は主にどなたが担当されたんですか。星埜さんなんかにはどなたが、

安孫子

後記は福武先生お書きになつていらっしゃるんですね。

中村 多分いろいろな問題は問題として、議論はあちこち行われて

いたけれども、根本の村とは何だというものはなかった。それに

これ、こたえたんじゃないですか。少なくもこたえるように見えた。

村研は村について勉強しているんだ、そういうことじゃなかつたかと思いますがね。村落研究とかそういう種類のものはない

ですよね。

高山

ここで中村先生が、煙山の調査というものを踏まえながら、日本

日本の村という問題についてお書きになつていらっしゃる。その後で、『日本の村落共同体』を先生はおまとめになつたわけで、

あの考え方の骨子はこの中に入っている……

中村 この中に当然入っているものでして、それもまたいろいろ書

いたり、補充したりはしておりますけれども、出発点、あるいは出発点はもつと前かもしれません、それはまだ懷疑の状態で公にはしておりませんけれども、多少生まれてきているのは、社会史という本に私書いておりますから、それに部分的には出しておりますけれども……。

安孫子 煙山の本が出たと同じ年なんですね。あつちが春に出て、

これが秋に出るという。

高山 そして、なぜ私、お伺いしたかったかというと、これが出た

後で、共同研究で村落共同体の問題を取り上げるようにな

つてているという、そういう順番があつたと思うんですけれども……。

安原 煙山というものが『研究通信』に今度出ますよ、ということ

が出ているわけです。全体としては人口をやつてる。

高山 ええ、人口をやつてるんですね。

安原 年報は？

高山 『村落共同体の構造分析』が出る、編纂されてるわけです。

福武 私が書いてるのは、そんなことを書いてるかな。「本来なら

昨年第三回の研究通信の共同課題、農家人口の変動と家族の構造に関する特集が、第三集の内容をなすべきものであった。しかし

このテーマがさらに論議を重ねる意味において、本年の大会に引き継がれることになつたため、見られるように構造分析を一出した次第であります。」（笑）

高山 そうなんです。そこで一体どうなつてるのか。そして、実は

この本が出た後で、次のシンポジウムで村落共同体を正面から取り上げる。むしろこういう研究が、先に各々の先生方の蓄積があつた上で、これをもとにして——だからこれは、ここに村研の村落共同体論にひとつ集約されていったのかな、という感じがある

んですけども。最初のいろんな研究が……。

中村 私の記憶では、ここへ収載していくのが本筋じゃないか。一生懸命そうやろうじゃないかというような気はあったと思います

ね。しかしこれは、共同でやつたものは非常にまとめにくいで

すよね。やはり個別的の問題の研究が積み重ならないとできないことだし、その辺がうやむやになつたような感じがするんですね。しかし、皆さんのがそれの個別の問題を取り上げてる時にも、腹の底には村落社会といふものはあつたんじゃないんですか。それがあつたんではないと、村研といふものはむだな会合だったということになりますね。

福武 当時の情勢からいつて、村研は一言なかるべからずという、そういう気になつたのかもしれませんね。

小池 これは僕はよく覚えていないんですが、編集委員会では村落共同体を取り上げようじゃないかという動きが編集会議の中であつて、そしてだれに頼むか——いま思いますが、星埜君には僕が頼んだんだ。

安原 大体この本が出た頃あたりから、一体村とは何だということが、これからしょっちゅう話題になつてくるんですね。

中村 これから話題になつてきたでしょうね。だから、いつでも腹の底には、村とは何であるようになつたというんじゃないでしょうかね。

高山 この本が出たんで、村研の場でも村というのが非常に大きくオープンな形で討論されてきたような感じもするわけで、そして実際に村落共同体のシンボジウムをやって、その後でもう一度『村落共同体論の展開』ということで編集した。だけど、こつちの方が売れてるんですね。後の方は余り売れなかつたんじゃないですか。(笑)

福武 それは時代の流れが、星埜博士が書いたりなんかして、とにかく関心を集めておつた時ですよね。それからちょっと下火になつちやつたものだから、その次は売れなかつた。

安原 結局それぞれの方々が問題意識はそれぞれにお持ちになつていて、内山先生なんかずっとその前から調査やつておられるわけですね。中村先生がフィールドやつておられたり、問題意識はそれぞれ違つていて、しかし何かそこに求めるという意欲や熱気が、相当出ていたということがいえるんですね。

福武 先生は前からずっと調査を一緒にやつて、小池先生と内山先生と有賀さんが顔合わせるなどというのはテンションが初めてで、その以前にはそういう話は全然ないわけですか。

福武 いや、内山君とはほかのつながりもあるし、ただ小池さんは先ほど言つたようにテンションで、有賀さんに相談して、それで小池さんも来てくれたと思います。

内山 その時に初めてお目にかかるつたように思うんですね。テンション調査以前にお目にかかるつたことがありますか。

小池 人文科学会で、僕は封建遺制の時というのは知つている。

科学委員会……

安原 内山先生は、有賀先生にお会いになつたのは何時頃ですか。

内山 総研の専門委員におなりになつていて、ときどき御出席になつた……。余りお近しい関係にはなかつた。それで、テンション調査ですね、一緒に村へ……。

安原 一方ではテンション調査だといい、一方では中村先生、個人的なおつき合い、そういう橋渡しがたいのは、やはり有賀先生が……

福武 そうですね。だから」説のように、親玉をつくらないという会議なんです。そういうものでずっとときてますけれど、一応喜左衛門さんが中心で、喜左衛門さんが中心でなかつたら、中村さんを巻き込むということはなかつたと思いますね。

安孫子 会則がないということと、会長がいらないということ――

福武 会則は一応あるんです。

安孫子 そうですか。約束がないんですね。もう一つないのが、第一回で閉会の辞がないということで、あれは先生、何か特別なお

考えのもので……

中村 いや考えじゃないんだ。最後にあそこの主宰というか、場所のあれだから、「おまえ閉会の辞をやれ」と言われたんだ。おれは演説は大きいだから、「よしにしましょ」と言つたら「じゃあ、よしにする」ということを言え」と言うから……。(笑)

安孫子 来年まで続けましょうという話になつたんですか。(笑)

福武 そうなんで、きわめてインフォーマルで、会則だってあることはあるんですけど、いまの閉会の辞なしというのに示されるようには、初めから閉会の辞なしにしようということで始まつたわけじやないんで、たまたまそういうことになつたものだから、それが伝統になつたというだけの話で――

〔〕

高山 そういたしますと、きょうおいでの方先生と村研とのかかわ

りなんでございますが、実際、初期の頃ああいう形で村研とかかわり合つたということで、先生方にとって村研というのはどうなものだったのか、一言ずつお話し願いたいんでござりますが。

順序つけずに……。

内山 昔はずいぶん飲んで議論して、それからお人柄のいい先生方――僕は先ほど申しましたように、アマチュア・ソロジストですから、本の上でお名前だけ見ていた先生方、有賀先生とか、福武先生もそう、中村先生、小池先生、そういう方々にお目にかかる

て、そこでまともなご教示を得たという記憶は余りないんですけども、(笑) コーヒー飲んだり、酒飲んだりということで、全身でその先生に接しられるというのが、僕にとってはものすごく魅力でしたね。むしろそれだけの魅力でいつもお世話をなつたというような――。僕は農業経済で、商売の農業経済関係には、それはもちろんあれでされども、ちょっとはずれるとなかなかそういう機会が私どもにはありませんでしたので、そういう意味ではものすごく貴重なものだし、そうやってお人柄がわかつたり、ダベつたりして、今度、先生のまじめな著書を拝見する時に、迫力が違つているんですね、そこでああいうかつこうして寝てたあの先生がこんなことを書いてると、妙なものですね。(笑) ということが僕にとつてはものすごくありがたかったような気がしてまいります。

それから後半からの村研になれば、これはなんか、その時お知り合いになつた先生、それから仲間の方々と、飲みにくみたい

な感じなんですね。はなはだ不まじめな話なんですけれど、そつちが八分くらいになっちゃって、あと二分が義理みたいになっちゃって、正直な話、申しわけないです。現在も義理の方も〇・〇〇ppmぐらいになりましたがね、もうばら失礼させていただくことになっちゃって、大変申しわけない。

お知り合いの方も、出るともう若い方々が多くなっちゃってますから、同窓会という魅力もやや、率直に言つて減つてきたものですから……。最初につまらないことを言いました。

内藤 私も内山さんと似たり寄つたりなんですが、この『研究通信』の付録みたいな『村研の足どり』というこれを見て、私は何回出たかというと、よく覚えてないけれども、十二回しか出ていないんですよ。二十九回だから、見送り三振が六割か七割あるわけだ。それならば、出た時に発表したかというと、僕の覚えだと三回しかないんですよ。だから結局打率は一割しかない。というくらいだから、僕は余り熱心な会員ではなかつたと思うんだけれども……。しかし東北の学会にはみんな行つてるんだな。勉強しに行つてるんじやなくて、観光を行つてるという——。たとえば、さつきもお話ししたとおり、東京で、神田なんかでやつてる時は、見向きもないんでね。私だけかも知らんけど、多少でも皆さんの中には、何か普通の学会はスケジュー<sup>ル</sup>がちゃんと決まっていて、シンボジウムとか課題報告とかいう儀式性がどうしても重視されるのに対して、村研の場合はボランタリーというのかな、あるいは同志的結合というのか、さつき言つたインフォーマリティー

といったようなものが、僕はこの会の特徴だったと思うし、僕もそういうように受けとめて、この会には参加できたと思うんです。中村 私も改まってそう言わると返事のしようもないというふうな関係で、ただ懐しい会ですね。ということは、現在、ずっとごぶさたしているといふことも自状していることになるんですけれども、しかし、最初に考へた頃は、これは有賀喜左衛門との二人の話で、まあまあになつてしまふからそつなるんだが、井戸端じゃなくて囲炉裏会議みたいにしようじゃないかといふことを言つたことがあるわけですね。だから、インフォーマルとさつきから盛んに言われておりますけれども、インフォーマルといふ点ですと取りとめないんで、懐しいといつても、何が懐しいといわれるよとまた困るんですけども、何か懐しい感じがするということ、それからもう一つは、少し聞き直つていうと、最初に考へたように、この社会学という学問に対しても、経済史あるいは経済学というものをぶつけた時に、そこでどういうふうな現象が起きるかといふ、その現象が余り起らぬいで、化学変化が起らぬいでただ投入してしまつたというような、そういう感じで、むずかしいものだな、という感じはいま改めてしていいるんですけどね。これをプラス幾つかでイコール何かが出ないでイコールはやはり幾つかになつてしまつてゐるような、何かそんな感じがするんですけども、しかしこれは、私、最近出席しておりませんので、最近

農業がなくなつてしまふと、むしろ村落が共通の場になるかも

しれないね。(笑) そんな感じで、むずかしいなという——これ

は別に不満というほどじゃありませんが、そういうことと、それにもかかわらず何か懐しい会であるということ、そんな感じですね。

小池 僕もこの頃ほとんど出てませんからね、最近の情勢、どんなよくわからないんで何とも言えないんですけれども、とにかくこれは愉快な会ですよね、学会の中では無類の、例のない愉快な会です。先ほど中村先生、懐しいと言われたけれども、そういう意味でやはり懐しいんでしうね、出るような条件が整えばいつでも出たいという、そういう会ですよね。どういうことなのかといふと、例の泊まり込みというのも、初めは僕は恐れをなしましてね、風呂へ入っても、各部屋へ入ってもみんな議論吹っかけられるんだと思ったら、どうじゃないんでね、そこが大変愉快だったと思うんですよ。

いままでここで一番感じてきたことは、社会学的な物の考え方というものをつけくづく思い知られたな、ということですね。もう一つは、社会学者といいうものは非常に緻密な議論を立てて、独自の構想を持っているのかもしれませんけれども、経済学者の言うことはちつとも聞いてくれない。(笑) こっちは一生懸命聞いてるんですよ。そして、それをこっちなりにいろいろ思索しているんですけども、社会学者は一向聞いてくれない。社会学という学問はずいぶんむずかしい学問なんだなと、毎回つくづく思いましたね。(笑) これでね。

中村 それなんだよね。なかなか設は破れない。

福武

皆さんおつしゃったような性格が、私よりお一人ともお年

上だけれども、やはり懐しいと言わせていくんだらうと思うんです。社会学とは、どうも経済が言つても学んでくれないという……(笑) そういうくらいはあるんだけれども、やはりいろいろかみ合ってきたことがよかつたんだというふうに思います。一番ま

あ、勉強にもなったんですけれども、組み合わせでもむずかしいのは、歴史と現代を同じテーマでどうやって結ぶかというのには絶えず苦労し、それで必ずしも成功しなかった。そういう感じはするんです。それにもかかわらず、経済史の方から報告してもらうというようなどころに、この研究会の特徴があつたんだろうと思います。

私としては、これだけの会員がいて、全国で同じようなことがどういうふうになつてゐるのかを持ち寄ろうじやないかということを言つたことがあるんすが、そういうことは、結局成果を上げなかつたような気がするんですね。初め、共同調査などというのを意図したわけですから、もう一度そういったことを、いまの若い方に考えていただけないかな、そういう気がするわけです。この村研が、いろいろの分野を糾合してというのは、戦前にはほとんど見られなかつた学際的な調査という機運の中に、そういう発想も出てきたと思うんですが、当時どれだけかみ合つたか知りませんけれども、学際的な調査ができるというのは、一面においてお金がなかつたわけですよ。あつたら飛びついたものだから、集まらないかというところがあつたわけですよ。ところが、いまは

豊富になつたものだから、学際的に他の分野の人も一緒にという調査が非常に少ないですね。そういうこともあるんじゃないかと思うんですが、そういう状況ですから、実際に共同調査というのはむずかしいだらう。しかし、いまこういうことが問題だとすると、そういう問題がそれぞれの違つた地方で、違つた条件のもとでどうなつてゐるのかというのを持ち寄つて、議論するということをしていただけたらな」という気はいまだにしているわけです。

それから年報についてですけれども、これは初めから時潮社の親父さんが乗り気になつてやつてくれたわけですが、かなり売れることからの制約もついたという記憶はいまもあるんです。それがいよいよだめになつた時に、塙書房に渡りをつけて、とにかく十年ほどやつてくれたといふのは小池さんの功績で、小池さんがそのお膳立てをしてくださつたから、十年も続いたわけです。お茶の水書房ということになると、いまの中心になつてやつてられる諸君が渡りをつけたんすけれども、なお、刊行物の方でどうもうまいかなかつたんですが、これも農村SSMが絡んでまして、農村SSMの調査費を、有賀さんが使い切らなかつたというのか、少し残つたのを私に寄託して、それで始まつたわけですが、それを順繰りに利益を使えるという、そういう目論みだったんですねが、これはみごとに失敗してだめだつたですね。そういう思い出があるんですよ。

内藤君が何割だと言いましたけれども、私もだんだん打率が下がっていくんで、初めの頃はわりあいよかつたんですけども、

それがだめになつたのは紛争ですね。私、伊良湖へ行つていないよう思つただけれども、それまでは一、二の例外を除いて出て行つたんですが、あの紛争のことでも篠山に参加しなかつた頃からおかしくなつて、それから四十五年くらいから調査をやらなくなつて、やはり村研でちゃんと活動するためには、フィールドワークやつてないと、どうも平仄が合わない。出ても機知いなどいうだけのこと、「やあ、こんにちは」ということになつてしまふ。そういう感じですね。

高山 最後に福武先生おつしやつたように、村研といふのはそういうフィールドといいますか、実証といふものをひとつ暗黙の土壤にしていたという、それが基本だつたと思うんでござりますけれどもね。

小池 年報について申しますと、学会でこういうような年報の出し方をしているところは非常に珍しい。大抵の学会といふのは、年報の費用といふものを会費の中に組み入れて、そして会員に買つてもらうことによってようやく出していくんですね。それが、ここは一切それやらないでしよう。しかも三十冊近い年報が出ているということは、これは学会じゃ驚異だらうと思うんです。これは全く市販に頼つてているわけでしよう。もちろんこれから後の問題も、書店の問題が出てくると思いますけれども、出版社の相手のご声援に対してもあるでしょうけれども、ただ、年報をこういう形で出しているところはない、誇つていいことだし、そしてまた復刻版が出ているでしょう。古いところはなくなつて、事業

がなお続いている。これは大したものだと思うんです。

これは、フィールドワークを中心にしてやつてるという点、非常な強みであり……。

中村 途中かもしれないが、いま福武さん、両方の先生のお話聞きながら思いついているんですが、初期には村落共同体というのでひとまとめが出たでしょう。ああいうぐあいに三十年たちましたから、現在の村落を各地の調査の結果なり体験の結果なりで報告し合つたらどうでしょうね。

高山 今年度は大会いたしまして、そういうことを計画はしているわけでござりますけれども、

中村 そうですか、やはり区切りがつきますよね。一体どうなってるんだということでしょうね。部分的な問題としてはいろいろ聞いておりますけれども、しかし、それならそこでの村というものはどういうものがあるのか、もうないのか。ないならないではつきりした方がいい。それを一遍、村研でこそできることだから…。

高山 村研が出発して十年目のところで、表題は「農民層分解と農

民組織」、時潮社版の最後のものですが、ここで、村落研究十年

の歩みということで、研究だけの研究史的なものは出したけれども、村落それ自身についての評価といいますか、先生おっしゃる

ようなことは、正面切ってはまだやつていない。十年たつての二

十年のところでもやつていない。そういう意味ではやつております。

中村 だから、この辺や一つやつてみて、現況かくの」とじという

のを村研が示してくれるといいんじゃないでしょうかね。

#### 四

安原 いま中村先生から、いまの問題はこれだ、ということを示せというお話を出たんですけども、先生方が一番最初に研究されていました頃、発足の頃を伺いますと、村の状況も非常に大きく変わったわけですね。農があるかないか問題はあるかと思いますけれども、いまご覧になつていて、大体こういうところが一つのポイントになるんじやないだろうかということを、ちょっと伺いたいと思うんですけれども、どうでしょうか。

中村 そう言われても、とっさにこれこれと挙げるわけにいきませんけれども、私など直接波しぶきかぶつてる問題としては、共同体論なんていいうのが盛んに出てますね。実際は何を踏まえて言つてるかわからんんですね。共同体への回帰とか、うまい言葉だけはたくさん出てくるんだけれども、では、いま現在何をもとにして言つてるとかいうことが、村研をまくつてみても出てこないですね。村研の年報をまくつてみたら出てくるということになると、これは便利でけんかしやすいんですけども、それがなると、これは便利でけんかしやすいんですけども、それがないわけですよ。ですから、村研あたりはそういう地道な、あるいは基底になるような点を村研でこそ押さえておくということは、義務じゃないですか。

小池 これは大変なことだ。(笑)

中村 村とは何である、それをやつておかないと、村研の存在理由

がないと思うんですよ。

小池 これは村研が始まつた時から問題にしてるんですね。

中村 そうだよ、そしてしかも三十年の間にガラッと変わつてゐるわけだ。だから、初めの理屈じゃ、いまは合わないわけだ。だけど、共同体論というのはちょっと激しいですよ。多過ぎますよ。

高山 村回帰論というのですね。

中村 そうそう。そしてそれがまた、日本への回帰とかいうところへ吹っ飛んでいくわけだ。だけど、その一番もとになる村は何だといつたら、団地だということになるでしょう。団地で神輿かつぐのは共同体ということになつて、それでいいのかどうか。それでいいなんならいいという結論を出しておかなきゃいけないと思うんですがね。だから、それを対話の時にも私は時々発言したことがあるけれども、ひやかみみたいにとられちゃつて、はじめに取り上げてくれないんだけれども、おれはいまあそこで、新しい千軒ぐらいの新興住宅地にまとまっているんだけれども、これが村かということを問題として出したことがあるんですけれども、だれも相手にしないんだから、だめだ。

安藤子 天童大会ですね。

中村 だから、そういうところは村研は、共通課題というか、共通の認識として持つていた方が本当じゃないかと、常々思つてゐるのですがね。

内藤 私の場合は村というよりも家であつて、家というより家族という形になつてしまつて、どうもそういう意味で、村落研究会と直接の

つながりがあるということはちょっと申し上げられないと思うんですよ。

ただ、私が村研に関心を持つたのは、戦前から若干漁村に興味を持つておりますし、漁村に興味を持つたというのも、実は日本の漁村じゃなくて中国の漁村で、これは牧野さんと向こうへ行つて、中国の場合は日本と違つて差別——という言葉はいいか悪いか知りませんけれども、日本の場合はどうしても村じや農村が主体になつて、漁村といややは、てめえたちは食えねえということで、もう一つは生き物を殺すからというような、いうなれば差別感というものがあるんですね。中国の場合はそういうのはなくて、堂々と生活しているので、牧野先生と向こうへ行つた時、「帰つてから漁村をやろうじゃないか。これは穴場だ」といつておつたんですよ。その後もいろいろと経緯がございましたけれども、末子相続みたいな妙なものをやって、いわば家族慣行みたいなことになつて、家族慣行というのを調査したのは、農村よりもむしろ漁村の方が多いんですよ。というわけで、若干村研に関心を持つたのは、漁村をやりたいというような気持ちで、これは果たさなかつたんだけれども、最終的には漁村における家族というようなものに収斂していったところまでは、いえるかと思うんです。ですから、私と村研というのは、いつもそれ違ひみたいなものだつたということです。

中村 それ違いじゃなくて、いつも楽しそうだったね。（笑）しかし泊まりという形式、あれは実際にそこで議論するかどうかなん

てことは問題じゃなく、しませんけどね、私、あれは何となく雰囲気がね。われわれにとつては社会学者という爬虫類だか何だかわからんようなものが、やはり同じ人間だと……（笑）そういう交流、あれは僕はどうといつてるんだ。

小池 村寄り合いですからね。

中村 ええ。やはりいろんなやつが一緒にいてみると、一緒にいるものだという、そこが出発点じゃないですか。（笑）

内藤 有賀先生のお人柄というのかな、それが大きいと思いますね。中村 彼も、しかし、経済に対しては偏向的に嫌いやがってね、弱ったんだ。（笑）しかし、一緒にやらなきゃならんということはしょっちゅう考えていたから……。

安原 村がどうなっていくかいろいろ問題があるでしょうが、農業はだんだんなくなつていきつたあるんですけれども、村研の若い会員はふえてるんですね。

中村 そういう連中に一つの指針を与えるというか、問題を一緒に考えたらいいんじゃないかと思いますね。農業を知らない村落員が出てきたかもしれませんな。

内山 しかし、他方で、農大の卒業生、わりに実際の農業について村で生活している人が多いんですよ。一週間ばかり前に大分でミカンをやつてる二十七人の人が来ましてね。卒業して千葉大の園芸のマスターへ行って、帰つてからミカンをやつているのが来まして、電車なくなるまで一緒に飲んでたんですけども、ものすごく印象深かつたんです。

つまり、ミカンもご承知のようにダメでしきう。ハウスミカンを二反歩やつてるんだそうですよ、ハウスミカンがはやりで、ものすごくもうかるらしいですね。そう言つてました。ところが、「先生、ハウスをかけながら、どうも妙にストレスがあつてしまふがないんです」だから私は「大学や大学院でやるみたいに試験もないんだし、百姓やつてストレスあつたらしきうがないじゃないか」「何だかわからないんだ」と言つたんですね。「とにかく作業をしていて、自然の中で、土の上でストレスがあつてしまふがないんですよ。こんなにかえつてストレスが強いとは思いませんでした」と言つてましたよ。何だと言つたら、さすがにマスターまでいつたから説明うまいんだ。自己の状況を説明するんですが、とにかくいまお話の村落の話も、実行組合長とか何かのようなことをやつても、人が集まらないと言うんだな。幾らやつても集まらない。二人ぐらいの若い人と一生懸命やつても、とにかく人が集まらない。集めるのに四苦八苦だ。おばちゃんばかりだ。普通の話ならいいけれども、ちょっとまともな基盤整備とかいうことになつてくると、親父に出てもらわなければならないだけれども、全然出てこない、どうにもならないということと——これ、村落が崩れたのか崩れてないのか、そこまでの議論はいろいろ問題があるからしませんがね。

それから、いまの市町村の行政村の段階でいうと、大分にも何かテクノボリス構想というのがあるんだそうですね。つまり農工両全といつて、テクノボリス構想というものらしいんだな。それ

にひつかつてきている。だもんだから、農業委員会が、農業委員会といふけれども、転用委員会だといふんだな。とても農業委員会なんていえない。

それもまだ未婚なんですが、結婚問題のことがご承知のとおり嫁不足で盛んにいわれるけれども、農業委員会の会長のビヘイビアを見ると、とにかく一生懸命、農業委員会だ、役場だ、普及員だといって、寄つてたかって嫁の世話をみたいなことをするんですね。それはありがたいみたいだが、結局、見ると必ず仲人したがると言つてましたね。仲人して自分の町会議員だか農業委員会の選挙だか知らんが、票目当てだと――。それから、自分の農業の数少ない先輩だと思っていた人が、結局は農業を食い物にしているというんだな。

それから農協は、いまご承知のとおり農協全体景気が悪いわけで状況悪いんですけども、そんなことがあるものだから、しかも農協をそでにしちゃうと、ご承知のように近代化資金その他の制度金融を受けにくくなるというわけですね。ということから、いやでも農業でも何でも、高いけれども農協から買わなきゃならない。そんなことがあって、農協は農民組合なき後の、農民の唯一の利益代表組織ですが、それに対するものすごく不信を持つてゐる。農政に対してももちろんですね。そういうことでイライラしてきて、ストレスみたいになつちやうと言つてました。ストレスがきつくつかないませんよ。東京へ出てきて、こうやって友達と先生方と飲んでるのが唯一の救いみたいですよと言つてましたね。

つまり、戦前の農政はご承知のとおり天皇制の奉仕国家ですから、いざとなれば、農村恐慌の時でも、十分じゃないけれども国が制度として、理念としてカバーするように、農民を支えるようになれた。それが、憲法、民法改正でそれちやつて、戦後、この村研究足ぐらいまでは食糧増産ということがあつたから、いわば制度的にというよりは、経済的に支えていた農村を、それもどちらかって、いまご承知のとおりの情勢で、国全体も農民を支えるものはない。市町村もない。農協もない。村落もない。ギリギリいくと家族だというんですね。ところが、その家族が專業で百姓をすることをきらつた。農業なんてばかなことをやるな。その辺の市町村役場にでも勤めて、月給取りながらミカンでもたんぼでもやるのが、経済的には一番いいんですから、そういうことで親まで反対する。回りはご承知のとおり、専業農家青年はものすごく少なくなつてゐるわけですから、友達もない。ということです、とにかく完全に何物かが自分のすぐ回りまでワーッと押し寄せてきてゐる。戦前の農村であれば、國家なり村落なり家族なり、あるいは家連合なり、その他もろもろのあれがあつて、農民個人を厚く幾重にもカバーしたと思うんですね。それが全部家族のところまでとれちやつた。それで、個人のところまで何かが押し寄せて、これが資本というのか何というのか、いろいろ言い方があるんでしょうけれども、そういうことで完全に太平洋の真ん中を木ノ葉船で揺れてるみたいだというんですね。

僕もこの四、五年、実は農民の自殺をずっとデータ集めてやつ

てるんすけれども、データは申しませんけれども、世界的にも農業青年の自殺がこんなに多いところは恐らないと思うんすけれども、仮に、自殺ということは一つのインデックスに過ぎませんが、農大のあゝいう卒業生を見ると、資本あるいは都市というか、いろいろあるんでしうけれども、そういうもののが、村の境を越え、家のへいまで破って、個人に突き刺さってきているという状況。むしろそういう意味でいうと、いまの問題は農民というふうに、ペーソナルに接した感じで言うと、家とは何ぞ、村落とは何ぞという、いまやつての百姓の人間とは何ぞと言つてはいけませんが、存在とは何ぞと言つてもいけませんが、何かそういう意味で、僕はどうも社会学、経済学というよりは、暴走して余り科学的でないという批判は甘受しなければなりませんけれども、実存的次元といいますか、そういうものを問題にしないと、少なくとも彼らのあれにこたえられない。

農民だけじゃなく、全体の社会状況、世界状況自身もご承知のとおりの状況ですから、そういう次元で一體村落社会研究会といふものがあり得るかどうかというふうに——。また、そういう次元からもう一遍出て、村落とは何だ——仮にいえば土地所有ということが一つの鍵概念になるとと思うんですけども、実存と土地所有というか、所有といいますか——変な話で失礼ですけれども、マルクスの言うように人間のヘルヘルテンと押さえる。ああいうところでもう一遍返つて、人間のヘルヘルテンと、所有、それから村落——そういう意味じゃ、村研に哲学者というのは、考

えてみると入っていない。ハイデッガーは農業といつてはいけませんけれども、村落といつてもちょっとといけませんが、つまりハイマート論というのがハイデッガーの生涯の課題みたいなもので、そういう意味じや、日本の学者の中にも、農村というか、土着性というか、そういうことについて関心をお持ちで、その関係から、日本についても関心をお持ちの学者というのは、僕幾らか知つてゐる。そういう意味じや、村研がいよいよ村の寄り合いで混雜するかもしれませんけれども、そういう学者までも含めて、もう一段拡大していくというふうになつたら、いま中村先生その他がおっしゃつてはいる、村落とは何ぞやということについても、現代原子力DNA社会的な意味で、もう一遍つかまえどころが出てきやしないかというのが、僕のドグマなんですね。細かなデータ載らないんですけども、今度、八〇年センサスには出ましたが、たとえば一例だけ申し上げますと、昭和五十五年までの八年間に、全国に十四万幾つかある農業集落のうちで、大中小は別にして、とにかく工場ができるところは、北海道を除く府県で約七割ですね。これが、その前の三十五年、四十五年のセンサスの時の十年間、それが約四割ですね。これはどういうふうに整理していいかわかりませんけれども、いらっしゃればわかりますけれども、どんな山村に行つたって、下請みたいな工場がある。そこで何がしかのおばさんが何かやつてゐる。つまり、現象的に見れば、至るところもう工場が、あるいは資本がといつてもいいんでしようが入つちゃつてゐるし、われわれも商売です

から、毎年毎年土地の転用の面積をフォローしているわけですが、列島改造論の時には十万町歩を超えた土地の転用があつたわけですね。六百万町歩としても、列島改造論のピークは、最高で十五万町歩近くいってるんです。六百万町歩ですから、四十年でなくなつちやうみみたいな勢いで、現在だつて十万町歩ちょっととのところでしょう。これが、村研発足の当時ぐらいだと、まず一万町歩なんという転用ないですからね。土地を取り引き、といつてはいけませんが、人をひっぱるし、金を持つてくる。土地、労働力、資本というものを引きあげちやつて、そのかわりにでかい奴をバーッとそういう形で工場、道路というような形で一いつまりそれは国民所得統計の民間設備投資という、あるいは公共の設備投資の合計で出てくるわけですが、ものすごい額になつたわけですね。こういう状況の中、農業青年の皮膚のところまでバーッと入っているという状況。そういう意味で、村落の自治とか、さつき中村先生がおっしゃつたけれども、共同体回帰とか、そぞららしいといふんですね。そんなものはそぞらしくて聞いちゃいられない。村研の自治も結構だし、共同体もいいんだけれども、やや率直に言つて、先ほど福武さんのお話もあつたけれども、僕ら年寄りから言わせると、テーマなり研究調査なりの実施が、研究費に引きずられるといいますかね。つまり、そうじやなきやなかなが農政調査会とか農林省から金が出ませんから、科研だつて、やや現在の研究費の支出のあれからいえば、トピックに引きずられますから、いわば農政なり全体のボリシーや研究が引きずられ

ちゃつて、集落農業とか、地域農政とかいう方に、学者までが研究費を一つの媒介にして引きずられていく可能性がもしもあるとすれば、これは最初に中村先生がおっしゃつたように村研の創立の基本精神は、個人の研究と、個人の村とは何かという研究衝動にある、やはりその原点というものは、いま改めて帰れというのにはいけませんけれども、思い起こしてしかるべきだというふうに、つい一週間ばかり前の話だったのですから、印象深くて申し上げたかつたんです。

それで、僕ら、皆さんのように純粹な学者じゃないから、目の前にそういう人がいると、どうしようかとすぐ思つちゃうんですね。それで、帰りの電車の中でいろいろ悩むんだが残念ながら答えは出でこない。いつか柳川の学会へ行く前に寄つた僕の学生ですけれども、彼は百姓やりながら座禅やつたり、『歎異鈔』読んだり、そこまでいかないとどうにもならないんですね。決して例外じゃないんですね。別に座禅やり、『歎異鈔』読むということが、直接の現象ですけれども、そういう似たような動きをしている青年というのは、実際に多いですね。というような状況になつていて、おれ何ができるかというのをいつも自問自答しながら、答えが出ない現状で、ひとつ村研なり、諸先生方のご教示を得たいというのが、いまの一一番中心的な関心なんです。

#### 因

安原 そういう方向に話題が移つていきましたので、これから村研に一きょうは村研の第一世代の方々に来ていただいているわけ

で、いまの若い人は第四世代ぐらいじゃないですか。そういう若い人たちも含めまして、こういうことを希望するとか、先輩としてこういうことを注文したいということを、この機会にざっくばらんに伺えればと思いますけれども。

福武 そういうことをいう資格もなくなつたんですけれども、かねがね思つてることをちょっとだけ申しますと、前にもそんなことを、通信が何かに少し書いたことがあると思うんですけども、畠畠裏端の調査なんていうのはそういうことなんですね。それが端的に出るんですけども、自戒をこめていいますと、やはり外から村をちょっと見えて、わかつたような顔してきたんじゃないかという気がするんです。中村さんなんて、腰落ち着けてひとつとこに長々取り組む。古島さんが前に吉治さんに言われたんだけど「そんなに浮氣するな、あっちこっち浮氣するな」と言われたつて……（笑）それをいまだに印象深く思つているんですけども……

中村 両方ですよね。両方なきゃいかん。

福武 そういうことは別として、いまおっしゃつてある両方が望ましいんですが、それは置きまして、一般的にいってそういう例外の人は別として、われわれだけ村に腰落ち着けてやつてきたんだという気がするんですよ。それで、広く大きく調査をするといふこともちろん必要なんですが、同時に、村落研究会だから、やはり単位としての村を丹念に見るというのをやらなきゃいけないんじゃないかという気がするんですね。それだけじゃ今まで

はそれに引きずられて、きだみのるみたいになっちゃうんで、困るんですけども、しかし、それは村研としては必要なんじゃないかという気がするんですね。そういつたことを、少し若い会員の人にも考えていただきたいという気がするんです。たとえば、私の親友のドラーと私を比べて。日本人の私が村へ入つてなくて、ドラーは入つているんですね。そういう反省があるんですよ。ですから、広い網をかけて、構造的に物事をとらえるということも必要なんだけれども、やはり村の中に腰を落ちさせて、何か一つのフィールドを持つて、絶えずそこへ行つて見てると、これが必要なんじやないかという気はしますね。

中村 それは村研という場が一方にあるんですから、村研を構成しているメンバーは、それぞれに自分のフィールドを持つていて、そうした上で村研という場にそれを持ち出してくるというのが理想型でしよう。それがどつちつかずになる危険がありますね。一人ずつが村研みたいな顔して、日本中のことを言つたり……（笑）

福武 だから、『おれの村では』と言えるようにならなくちゃいけないんですね。

中村 そうなんだ。『おれの村では』というのを、僕は自分の村で言えるんだ。それで、おれの村では、おれのところは分家のわしは次男だ、有賀喜左衛門は大地主の長男だ。二人で発想が違うんだよな。

福武 それは何も村を持つてなきゃいけないというのではなくて、

自分のフィールドとしてのおれの村で「おれがしょっちゃん行つてゐるこの村ではこうなんだ」と……

中村 この安孫子君たちの南郷も長いね。

安孫子 もう二十八年行つてます。

安原 いま福武先生おっしゃつたきださんの報告が、去年また出たんですね。ですから、意外に読者の要望みたいのがあるようなんですね。

福武 だけど、それは変な村への回帰ということから出てくるんだと思うんですよ。ただ、私はきだみのる好きじゃないんで、彼にも社会学者が何とかいったのが出ているんですけども、あいふうにもう村にいかれちゃたらダメですよ。しかし、彼のおられた別の条件があるんだけれども、読ませるだけのものがあるというのは、彼は村に住んでいたのが非常にプラスで、では、村に住まなきゃ物が言えないと、そんなばかなことを言うんじゃないんですけども、やはりフィールドは常時訪ねてるというものを持つて、そこでどうなつて来るかというのが裏づけとしてあった方がいいんじゃないかという気がするんですね。

そういうことだと、やはりいまの村がどういうふうになつてゐるかという議論がかみ合つてくるんじゃないですか。おれのところはそうだ。どうして違うのか。ということで……。

内山 先ほどの補足で、その問題は、実は安原さんが学会でふと漏らされた松枝岐村の「かろうと」の話を、ご本人お忘れになつて……

安原 覚えています。

内山 村研もこうじう問題を無視していいか、こういう問題提起がありましたが、安原さんのお話非常に衝撃受けまして、そのことを柳田さんの先祖の話とか、有賀先生の批判とか、もう一遍思い出されてしまつてね。

中村 そのことに關して、私、後の村研のこれからに注文をしておきたいんですけども、いまいろいろお話出しているように、そしてまた、社会学の諸君が前からそうであったように、どうしても問題が現在でしう。

それで、一〇〇〇年前となると、もう人のことになつてしまふ。しかし、村研は歴史部門をなくさないことが必要じゃないかといふことですよね。もう明治以後、何といったところで、いろいろ変化がありますから、それ以前なんていふのはとうてい必要なといふことになりそだし、はじき出す危険はあると思いますけれども、私は、村研はやはり原理的に成立し得るために、歴史部門がないといかんと思うんですね。そしてまた、村研のメンバーである限りは、歴史的なベースベクトタイプを持つてゐるような人間としての調査でなきや、やはり現状調査といったところで、目の前の問題だけになつたら不十分じゃないか。だから、これは我田引水みたいでなければ、将来とも歴史を重んじていくという、その点は堅持してほしいという、希望です、これは。歴史的なものから見てこないと、解決がつかないということがどうしてもありますからね。人間の社会ですから。歴史を除いたら、これはやっぱりダメですな。村研、その点はやっぱり一つの特徴と

して、置いていかれたらという気がしますね。

内藤 中村発言を踏まえて言わせていただきたいという感じがするん

村落”なんていう形で一般化する前に、やっぱり村の地域的ななバ

リエーションみたいなものをもうちょっとやる必要があるんじゃ

ないか。その昔福武君が同族結合だと、講組結合だと大きな大き

なスキマタイズはやつたんだけれども、そのうち同族結合的な村

はわりに記録があるんですよ。どちらかと言うと中部地方から、

東北地方にかけてのモノグラフといのものがあるんだけれども、

福武君が言うところの講組結合というものの内容ははなはだ不十

分である。

私はいつとき日本の村落が村であり、日本の家族が家であるな

んて言つたのは、データからすると、やっぱり東日本に大きく偏

つていると思うんです。だから結局信州とか、甲州の山の中とか、

あるいは東北の部落だとかいうようなものが、あたかも日本全体

の村落や、あるいは日本全体の村のモデルであるかのように取り

上げられているわけです。もしこれからもまた特別な、特殊など

言つうのかな、何か具体的な村を取り上げて調査をなさるとするな

らば、インテンシブな調査をなさるとするならば、調査のウェー

トをもつと西南型村落の方にかけていく。今までのデータのブ

ランクを埋めるような形になつてこないと、おかしいと思うんです。

私、果たして日本の村落が村であり、日本の家族が家であるかどうかということは、非常に疑問を感じている。この疑問が杞憂であるならばいいけれども、何せ裏づけるデータがないんだから、

もつと関西から西の方をやつていただきたいという感じがするんです。余田君がやつたのが、まあまああれは西の方の村の例としで……

中村 いま僕は、大学院の学生が九州のやつで、あつちの佐賀とか、あの辺の農村地帯の話をいろいろやつてあるんですけど、これは東北の民と、文明発祥地の九州の民と、どうしてこんなに同じことをやつてあるかと思うぐらい同じなの。心配ご無用じゃないかな。（笑）

福武 内藤君の言うのも一理ありますて、別に外国人がいっつているからというんじゃない。クライナー、あれは奥さんが熊本でしょう。『朝日ジャーナル』にちょっとといつたりしている。どうも日本の村の考え方というのは、内藤君が言つたような、同じようなことをいつているね。戦前の柳田さん、有賀さん、戦後の福武もそうだつたって……（笑）

安原 たとえば村研のメンバーで余り大会には参加されませんが、江守（五夫）さんですね。江守さんのような方のお仕事を議論するような機会が、意外に村研でないということがあるんですね。そういう意味ではやはり民族学の方なり、それから法社会学の方なり、初めはそれなりにコミットしてくださった方々が、最近余りお見えになつておらない。そうすると僕らは少しさびしいわけなんですけれども、これからもむずかしいかなとは思つてゐるんですけども、もしそういう機会がありましたら、むしろそういう方々にも……

中村 その問題にかかるかどうかしらんけれども、僕の感想で申しますと、僕は京都にいる三年間下賀茂の百姓屋にいたんですよ。

農家に。農家の離れの馬小屋の一階に。それでその農家のことをよく知っていますが、これは東北の農家の中では最も低いと言つてあります。これは東北の農家の中では最も低いと言つてあります。しかし、貧しい家のような生活組織。しかしじゃあ貧乏かと言うと、お金はちゃんとあるんだよな。だけどね、いろいろから、何から、そこらの状態というものは、ちょっと驚くほど……僕は東北へ行って、えらい開けていると思つたぐらいのものだ。（笑）そういうことなんで、行きずりに見ただけではちょっとむずかしいですね。

内藤 大きく言うと日本の村といふのは、畑作の村をどのぐらい皆さん見ていいかということ。非常にわかりやすい指標で言いますと、村自身が非常に大きいということですよ。近隣集団なんて、あって、なきがごとしこのものであつてね。それから生産力云々というような指標は別としてね。鹿児島の村をこんなになれば、あそこは門割制という特殊なものがくつづいているんだけれども、ちょっと日本の村というイメージ、東北の村から描き出すところの日本の村というイメージからすると、大きく外れている。

中村 いま議論をするつもりはないけれども、門割というのもおもしろいですよ。そんなにびっくりするものじゃないな。

安原 これからおもしろそうなお話を伺える雰囲気になつてきたようですが……。小池先生、経済学の方からということじや

必ずしもありませんけれども、なかなかみ合いにくいところもずいぶんさつきもあつたんですけれども、そういうところで、これから若い世代にこれはというようなご注文があれば……。

小池 僕はもう大分村の研究から離れているんで、それから村研ともごぶさたしているんで、余りどうも申し上げることはないとされども、ただ村研というは「宿題委員会」というのがあるでしょう。出発当時からの問題ですね。これは前の年に宿題をして、一年間かかつて次の大会までに村に入つて調査をして、その結果を持ち寄つて報告しようという、そういう制度だと思うんです。それがだんだん課題という形に言いかえられたことによつて、いつの間にか宿題という意味が薄れてしまつたんじゃないかな。これをもう少し忠実に守つたければ、大会で先ほどから言われているような論点のかみ合いというものも出てきて、この村では”というようなことが、わりあいに言いやすくなるんじゃないだろうかという気がするんですがね。

事務局 大分今後の方ともまとめて出てきたようです。研究方向なり、これから村落にある問題をゆっくり見据えていこうというところで、若い人達に対する要望もあつたと思います。私たち事務局としては、冒頭に申しましたように『通信』の特集号として、会員に早急に配布したいと思います。本日は、長時間本当に有難う御座いました。

## 特集 II

### 「村研三〇年の歩みのなかで」

#### 村研のふるさと鳴子温泉

山岡栄市

昭和三十三年（一九五八）八月二十六日、わたしは有賀喜左衛門先生から速達の御手紙を頂いた。近く開かれる鳴子温泉の村研大会で「共同体問題」について是非発表してくれ、との趣旨であった。むつかしいテーマではあり遠隔地のことでもあるのでいろいろ考えた挙句、そのころ出版した『大根島—その生態と課題』の対象地である大根島（現在の島根県八束町）にしようか、それとも調査進行中の斐川村農村（現在の島根県斐川町大字坂田）にしようかと迷つて、先生の意見をお聞きする手紙を差上げたらしい。九月四日に「ヒカワヨロシ、アリガ」という至急電を受取ったことが日記に書いてある。有賀先生もよほど気遣つて下さつたり、わたし自身も発表にそなえて現地調査に念を入れ、結局、題目を「新田地帯における村落共同体—斐川村大字坂田の植田家を中心として」ときめて事務局に報告した（余談に属するが、この植田家を中心として喜多野清一先生が「山陰農村における子方從属の一事例—山岡

教授の研究に依拠して—」という玉稿を、わたしの古稀記念論文集『地域社会学の諸問題』へ一九七九、晃洋書房に寄せて下さっている（）。

わたしは欲が深いから折角の東北行き、この機会にかねてから考えていた北陸や東北の漁村や漁港を訪ねてみたいと思い、少し無理な日程をたててみた。十月一日夜行で大阪へ、それから準急「ゆのくに」で初の北陸路。なんとも陰うつな福井の湿田地帯、しかし石川・富山は乾田化が進み民度の高さが感じられた。富山で一泊して翌日新潟県境に近い朝日町室崎漁村を訪れる。芭蕉の句碑も建つていた。その夜は糸魚川泊、翌日強行軍で新潟に着き午後の船で佐渡へ。初めて見る佐渡は何回も訪ねた鶴岐よりもはるかに大きく、両津の宿の女中さんから「この島に高校が六つあり、女中もバスの車掌も皆高校出身、米は必要量の二倍もとれる」ときいた。三三年段階でこのような教育普及率にびっくりしながら翌日は漁村白瀬を訪れ、国中平野を船出時間まで走つてみた。島にいる感じは全くしない。さて新潟で一泊後、水害後の阿賀の川沿岸を会津盆地に向つて走る。雨に煙つて磐梯山は見えない。夕方仙台に着いて新明先生宅を訪問し、八時半に鳴子の「農民の家」にたどり着く。硫黄の臭いが鼻をついたが、駅頭に提燈をともしてお迎え下されたことが印象深い—それはどなたであったのかさだかに覚えていない。玄関で、福武さんや竹内さんにばったり逢う。室は二晩とも余田さんと一緒に床に入つてから十二時近くまでお互に話し合つたようである。

翌十月七日、九時から開会。朝、有賀・喜多野・木下彰一諸先生

と挨拶を交す。わたしの発表は午後で、われながらよくできたと安心。夕方七時からの懇親会参加者は約六〇名、ドテラ姿で互いに胸襟を開いての学問論、人生論、終には余興という、村研ならでは味えない心と心との交流となり、わたしも一つおぼえの郷土民謡「関の五本松」を歌つたりした。やがて二次会ともなれば議論はますます佳境に入り、みんなよい気分になりなにかの示唆をあたえられた充足感で眠りに入るのであった。村研はよく温泉地を選んで開催されるが、温泉にひたりながら地位の上下も忘れて無礼講で話をし合えるのがなにより嬉しいことである。このことが村研への魅力を強め会員が急増した原因の一つであると思う。

九日気仙沼港調査を予定していたので、早朝四時半に起きて一番列車に乗る。車中で多分吉沢さんと一緒にいたと思う。十日には仙台から特急「はつきり」号の初運転車で上野行き。

鳴子での感激は大きかった。それは「村研のふるさと」であり、そこで三十周年記念大会が開かれようとしている。感懐転なものがある。

その後わたしは大会にはほとんど出ていない。記憶にあるのは箱根・伊良湖崎・金沢くらいで全く申証ない次第である。欠席理由の主たるものは体調である。三十八年から今日まで四回入院しているが、胃かいの痛みは日記によると三十年代の初め頃からあった。村研の発表者の持ち時間が二時間近くあり、それ自体はよいことであるが、量の上で同じ姿勢でいるときまつて胃痛がひどくなる。懇親会は楽しく有意義だがあとでひどく体調をこわし回復に苦

労する。いきおい欠席して研究通信にたよることになる。ところが研究通信がひどく読みづらい、マンネリの感も深い。「もう少しわかり易く…」と高山さんに申上げたこともある。何年だったか忘れたが「地域社会学研究会」が村研会員を主要メンバーとして新しく生れたが、あれでよかつたかどうか？。課題を各ブロックの集会におろして問題点を詰めてゆくことは非常に重要かつ効果的と思われる。感想に加えて欠席の弁お許しを乞う。

## 「村研」と私

### — 或る回想 —

住 谷 一 彦

村落社会研究会（以下「村研」と略す）との関係は、いまとなつてみると如何なる機縁にもとづいていたか、どうもはつきりした記憶で残っていない。おそらく大学時代からの友人である島崎稔君の勧誘によるのではないかたろうか。あるいは、福武さんが主唱者の一人であつたから入る気になつたのか。そのどちらでもあつたかもしれない。ともかく最初から何ほどの関わりを持っていたことは間違いないし、爾来いまに至るまで甚だ不熱心な会員ながら、止めないできているところをみると、私にとって「村研」はそれなりに或る意味を持ち続けてきているといつてよいのだろう。学会の会費も高くなつてきているし、私もやめたり、会費未納で自然退会になつた学会も結構あるのである。では、「村研」は、私にとってどん

な意味をもつてゐるのであろうか。

「村研」は「年報」をみても分るように、はじめからきわめて「学際的」であった。今日では専門分化の程度が進み、学会、研究会もそれに応じて増加してきて、学際的な学会は少なくなってきた。しかし、戦後初期はそうでなかつた。土地制度史学会のような、一見きわめて高度に専門的な学会も、政治・法律その他の分野の人たちも参加して熱っぽい討論がおこなわれたことを、私は覚えている。法社会学会や歴研もそうだった。その意味で、戦後初期の民主化という共通課題に総力をかたむけて熱っぽく立ち向つた「学際的」雰囲気を、その後もずっと持ちつづけている数少ない学会の一つが「村研」なのである。そうしたところに、私の何となく惹かれて、やめ難い理由の一つがありそうである。

「村研」は、私の理解しているかぎりでは、戦後の「農地改革」がどのような帰結を生むかを終始追及してきたようと思われる。それは、あるときは「村落共同体」分析であつたり、また別のときは「むら解体」であつたり、さらには「村落自治」を問うことだったりしたのではないだろうか。山田盛太郎先生の『日本資本主義分析』を持ち出すまでもなく、日本資本主義の基底には日本農業＝農村の問題が厳として在つた。私も書いたことがあつたが、山田先生のとき規定要因であった地主的土地位所有 (das Untereigentum) が解体を遂げた場合、なお日本の近代化＝民主化を阻む要因は何かあるのであらうか、また、在るとすればそれは何であるのか、それがいわば共通の問題意識であったように思う。「共同体」の問題が浮

上してきたのも、そうした文脈裡においてであり、その理解をめぐつて経済学・歴史学・社会学の間で何ほどのギヤップがあつて熱っぽい討論が繰り返されたことも、今では懐かしい記憶である。ただ、その過程でこれまで家族論、同族論など日本農村社会学の多年にわたる学的蓄積が十分に生かされず、全体として経済的な分析ならびに社会運動論的な視角が優勢を占めるようになったかに見えるところに、若干の問題が残るのではないかろうか。

もちろん、それには恐らく十分な理由があることだろう。近代化＝民主化の過程に、主体的に関与しようとする視点が既存するかぎり、そうした傾向が状況の如何で強まることは無理のないところである。しかし、「村研」初期の頭を顧みると、有賀・喜多野・小池三長老をはじめ、かなり自由に多岐にわたる問題の発言があつたように記憶している。家の問題一つとりあげても、有賀・喜多野論争の示すような、すぐれて今日的意義を持つような局面が存在しているのである。戦前から戦後、今日に至るまで、農村社会学・文化人類学が蓄積してきた多くの研究業績が、「村研」の特徴である学際的な討論のなかに組みこめるようななかたちでの研究方向が、これからの「村研」には望まれてよいのではなかろうか。

## 三十周年記念大会におもう

原 宏

九州に在住していたとき、私は中村正夫氏から、近く有賀一喜多野の線で村落研究者の結集をはかるという話があるので、ぜひ参加するようという趣旨の誘いを、前もってうけていました。

昭和二十七年十月二十六日の日記には、簡単に「懇親会・山上会議所」としか書いていませんが、日本社会学会大会の懇親会の終り近くになって、会場の一隅に有志が集まって話し合いをしたと記憶しています。この席で有賀先生にお目にかかるのですが、とくに親しくお声をかけていただきようなどはありませんでした。

前年の七月下旬に対馬巣原で面識を得てはいましたが、身近な御縁は翌二十八年のいわゆる「仙台大会」のときからでした（拙稿「李朝秋草手に託す」『未来』一六七号、昭和五十五年八月、未来社）。

先生は昭和二十九年新春の賀状に「……昨年は村研の大会で元気よくやつて頂いたので大変うれしく、又研究通信も九州勢の意気が大いに上り、これで上々の調子で進展出来るような新春のもり上りだという気持がしてゐます……」と書いて下さいました。大会直後の『研究通信』七号に、私は「第一回村研大会を顧みて」を投じましたが、ほかにも内藤完爾・大藏寿一、亡くなつた高倉又二といつた九州勢の印象記が大会特集号を飾っています。西日本、とくに

九州勢の出席と発言が先生の心頭に強く響いたのでしょうか。『研究通信』（昭和四十七年、復刻版）を読み返してみると、どれも少し取りすぎた筆趣ですが、私は前述のものを含めて、五十号までに六回投稿しています。

ところで、初期の『研究通信』は、技術的には稚拙な印刷物であつても、素朴で心がこもっています。とくに、事務局（編集者）の文章には、ひざき合わせて、やり取りする姿勢がにじんでいます。よく、村研草創の初心と言いますが、形に残るものでは、初期のころの『研究通信』、とくに一号から十号、または二十号あたりまでのものこそ、その象徴であると私は思うのですが……。

その『研究通信』は、一号の巻頭に有賀先生の「村落社会研究会の発足にあたり」を載せてスタートしました。二号は喜多野清一氏の「『研究通信』への期待」が巻頭を飾り、「第一号を手にして、そこに明るい親和の氣分の満ちていることを非常にうれしく思いました。炉端であぐらをかいて語りあつてゐる氣分を感じます。素人の印刷技術の拙いことは蔽えないがこれもかえつて村居炉辺の一興だと云つては、アバタもエクボの類に堕しましょか。けれどもみんながこだわりなく意見をのべることは、今后この会を発展させてゆく上の大切な要件だと思うのです」と書き、さらに年報と年次大会と『研究通信』とを合わせて、『ルーラル・ソシオロジー』創刊号の編集局宣言にいづまうな「フォーラム」を準備していくうではないかと呼び掛けています。

事務局手作りの一号・二号は情緒性が豊富で、カットに草花・郵

便ポスト・ガリ版・山羊・猫・おうむ・馬（おもちゃ）・人形・イ  
ンキ瓶とベン・電気スタンド・街灯・ラジオ・つば・だるま・蛸などが描かれています。なかには、煙突らしきもの（？）もあります。また、中野卓氏が会計の見通しが著しく好転したので、「研究通信No.2よりはNo.1の不評判を挽回する印刷が可能と存じます」と書いた会計報告もありましたが、三号からは少しきれいになっています。これらを見ても、当初からの会員なら、草創期の実情をほうふつさせる文題であることがわかると思います。十五号まではガリ版刷りで、十六号からはタイプ印刷となります。三号にはほほえましいカットの余韻がまだ残っていました。それも四号以下では、ほとんど姿を消してしまったのです。

村研には会長制がないのですが、研究会結成の最初の提案者であり、会の中心となつた有賀先生を「会長のような人」と思い、慕う心情は会員の間におのずと生じていました。『研究通信』四十三号に、内藤莞爾氏は「村研には初会以来、白髪の老人（？）が、世話役の席に座つてござる。この老人が会長さんかどうか、その点も忘れた。十周年で表彰でもしたら、おそらくご機嫌が悪いだろうが、とにかく会の成長や団結に、この人の人望と学識とが果したところは大きい。仙台は高校時代の古戦場とも聞いている。大会では、大いにその徳をたたえようではないか」と書いています。

会員は肩書きにとらわれず、会則も簡単にという趣旨でスタートしました。現在では共通課題（共同課題）あるいは単に課題とい

その推進役を課題委員といいますが、これも当初は宿題とか宿題委員と称していました。もつとも、当初の会則にはC-1-aで宿題といい、附則4では課題とも記していますが、十七号掲載の会則では課題に統一されています。宿題という言葉は、結局なじまなかつたのでしょうか。大会のことも、会則では共同討論大会・共同討論会・討論大会・討論会というぐあいに、短い会則なのに各様に表記されています。そういうことに、あまり頗着しないで、規約も大まかに定め、メモ書き程度のものでよいという空氣でした。それは、初期によく同志的結合という言葉が使われたことと無関係ではないと思っています。

このように、規約や機構などはおおらかでしたが、「村研は厳しい」というのが、若い研究者の間のもつばらの定評でした。

村研大会は、これまでにも何度か、「ふるさと」東北への回帰を繰り返してきました。今まで秋には三十周年にちなんで、記念大会をゆかり多い仙台で開くことになりました。三十年前を振り返って、雑感を記したまでです。

## 村研三〇年の歩みのなかで

君 塚 正 義

まず村研三〇周年に当り懐懐の一端を述べさせていただくことに對し感謝いたします。私はおそらく昭和三〇年頃の入会ですから古

手の方かと思ひますが、昨年秋の日光大会で柿崎会員の補佐役の人として事務局の裏方をさせていただいた程度で、余り眞面目な会員でなかつたことを反省しています。

いうまでもないことですが、村研のユニークなところは、第一に各種の委員会制で運営し、会長や副会長を設けないことでしょう。従つて大家の先生もヒラの私共でも自由に討議に参加できる。第二に大会は泊り込みのため深夜まで活発な交流のできること。第三に全国各地で開催して見聞がひろめられることなど大変たのしい研究会です。このように民主的で開放的な研究会は他の学会にはみられず、さすがに社会学者の組織であると敬服しています。またこのようないい伝統を築きあげてこられた先学の方々と、それを受けつき発展させた会員各位に更めて敬意を表します。

さて先学といえばまず有賀先生や野尻先生などを想い起さずにはいられません。たしか蒲郡大会（昭和三五年）が私の最初の研究会出席だったよう思います。蒲郡荘の会場は椅子式でなく、座敷で胡座をかけて報告を聞いたように覚えてます。当時まだ駆出しお僕は隅の方で拝聴したのですが、白髪で柔軟な有賀先生の端整なお姿が今でも眼にやきついています。

その後勤務先が盛岡（東北農試）に移つたこともあって、しばらく研究会から遠のき、天童と遠刈田の大会に参加した程度です。遠刈田では東北グループの方々と深夜までだべりかつ飲み村研の味を堪能させていただきました。昭和四九年から再び東京（農技研）に戻つたため、時折学士会館や中央大学などの在京の小集会に顔をだ

し、研究動向にも直接ふれる機会が多くなりました。

それから金沢（辰口町）・津和野・柳川の大会にも参加させていました。比較的関東や東北にかたよつている私にとって、西日本の風物は新鮮そのものでした。大会の内容や印象は、村研通信や研究年報にゆずり、ここではふれませんが、農村社会の「崩壊」や生活の「破壊」が進行するなかで、大会は年々盛会になり、報告も討議も深まつてきたように思われます。また夜の交流も一層活発となり、若手研究者も加わつて村研の輪が年ごとに拡がつてきました。金沢では帰途周辺の農村をたづね、津和野では名所めぐりをして、柳川では塚本会員や農水省の研究グループと舟下りを楽しんだことも楽しい想い出の一つです。

また奈良大会も是非参加しなくて予約しながら所用で欠席し、後藤会員など地元事務局に御迷惑をおかけしました。日光大会をお手伝いして事務局の苦労を実感した次第です。今年は研究会でも夜の部でも最も力量のある東北で開催するというので今から楽しみにしてます。古くから「農学栄えて農業滅ぶ」といわれてきましたが、「村研栄えて農村滅ぶ」ようになつては困ります。事実そのため三〇年間營々として農村の実態に即した理論的・批判的研究をつみ重ねてきたのが村研です。かつて鈴木栄太郎が「農村社会学原理」で述べているように「農民の生活原理を度外視した農村対策は所詮偏頗であり、姑息である」と。私達は三〇周年という節目に立つて、あらためて鈴木栄太郎を始め先学の研究に対するガイストと情熱と実践性に学ばなければならぬと痛感している次第です。村研の一層の発展と会員諸賢の御自愛と御精進を期待いたします。

# 村落社会研究会創立三十周年を迎える

今、私が考えていること

川本 彰

村落社会研究会が、本年、三十周年を迎える。ここ数年、身体をこわしてから、すっかり出不精になり、村研にも御無沙汰ばかりしていたせいで、三十周年という言葉をきいて、いささかがくぜんとしている。私自身も、いつの間にか老境に入ったことを今さらながら思いしらされ、痛悔をくらつた感じである。

ふり返って研究会の活動をみると、すでに既刊の年報が二十六冊、毎年、その年度のテーマをきめ、課題研究の成果が発表される。毎年刊行される年報テーマを概観すれば村研としての時代認識とそのうつり変りがわかる。

1. 村落研究の成果と課題（昭一九）
  2. 農地改革と農民運動（昭三〇）
  3. 村落共同体の構造分析（昭三一）
  4. 農村過剰人口の存在形態（昭三一）
  5. 戦後農村の変貌（昭三三）
  6. 村落共同体論の展開（昭三四）
  7. 政治体制と村落（昭三五）
  8. 農政の方向と村落社会（昭三六）
  9. 農民層分解と農民組織（昭三八）
14. 13. 12. 11. 10. むらの解体（昭四一）
  15. 村落構造変化の推進力（昭四三）
  16. 15. 村落社会変化の推進力（昭四四）
  17. 16. 15. 村落社会の変動（昭四五）
  18. 17. 16. 15. 村落社会研究の方法（昭四六）
  19. 18. 17. 16. 15. 村落社会研究の方法（昭四五七）
  20. 19. 18. 17. 16. 15. 村落社会における都市と農村の対立の諸形態（昭四八）
  21. 20. 19. 18. 17. 16. 15. 日本資本主義と家（昭五〇）
  22. 21. 20. 19. 18. 17. 16. 15. 日本資本主義と家（昭五一）
  23. 22. 21. 20. 19. 18. 17. 16. 15. 村落生活の変化と現代（昭五一）
  24. 23. 22. 21. 20. 19. 18. 17. 16. 15. 村落生活の変化と現代（昭五三）
  25. 24. 23. 22. 21. 20. 19. 18. 17. 16. 15. 農村自治（昭五四）
  26. 25. 24. 23. 22. 21. 20. 19. 18. 17. 16. 15. 農村自治（昭五六）

以上、二十六冊、村研がいかに戦後における農村変貌と取り組み、その時代的課題に答えるようとしてきたか、その姿勢が明かである。しかし、果してよく答えてきたか。また、きたるべき社会のあり方を農村研究を通じて示唆してきたか。こうとわれるといささか心もとない。もちろん、学問は日々の現象追隨にあけくれるものではない。しかし、それは高踏派のデスク・ワークでもない。われわれは

村落の変動（昭四〇）

むらの解体（昭四一）

むらの解体（昭四二）

むらの解体（昭四三）

むらの解体（昭四四）

むらの解体（昭四五）

むらの解体（昭四五七）

むらの解体（昭四五八）

むらの解体（昭四五九）

現実にいきている農業、農村、農民の問題を通じて客観的事実に迫ろうとするかぎり、農業、農村、農民が現代社会とのかかわりあいのなかで、感じている痛みを自分の痛みとして、その中から学問的事実を汲みとらねばならないと思う。

今、私が考えていることは、既成の常識がいかに、現代農業、農村、農民の痛みを理解するのに迂遠になってしまったかということである。既成の理論は現実の後追いにあけくれているきらいがある。われわれは今こそ、われわれの想像力、すなわち、創造力をフルに働かせ、新しい現実理解の学問体系を築く必要がある。

われわれ農村研究者が、農村研究に真面目にとりくめばとりくむほど、動かぬ農村に焦燥を感じ、自分を第三者的立場に無意識の中においてしまう。しかし、そのとき、われわれは既成の常識のとりことなつていて、私自身を自戒する意味で、こういう好例としての夏目漱石を見てみよう。

漱石は当時無名であった長塚節の才能を発見し、大新聞「朝日」の小説を彼にかけた。『土』がその小説である。しかし、その小説『土』は冗長、難解で悪評をきわめた。漱石はそれを無視し、ついにそれを完成させ、それが単行本になるや請われて序文を書いた。

有名な序文である。漱石の節に対する好意、評価は大であった。しかし、その序文の文章は今からみると誤解にみちている。農民生活を蛆虫のごとき哀れな生活と規定してしまったのである。しかし、『土』の蛆虫の如き貧農勘次の夫婦愛がいかに美しいか。それは漱石の『道草』における漱石夫婦の地獄図と比較してみれば明かであ

る。漱石は日本最高の作家であった。彼が農民世界を蛆虫のことじという。農村生活の評価がここに決定した。

しかし、当の漱石は根っからの江戸っ子。親友正岡子規の証言によると漱石の家の近所にある水田に生えている草、すなわち稻をしながらかっただという。漱石は幕末の生れ、それにしても、すでに都市と農村はかくまで隔絶していた。明治初期においてこの仕事である。農業国日本のからくりはどうなつっていたのか。農村はなぜにかくの如く人外の境であらねばならなかつたのか。日本近代の不可解を、とくに鍵はどこにあるのか。既成の理論をさておき、われわれはもてる想像力をフルに發揮して、この難問に向わねばならぬ。こう私は今、真剣に考えている。

## 村研の課題

白 横 久

一九六〇年代後半から七〇年代の「高度経済成長期」の激しい農村社会の変動のなかで、私たちは、いわゆる「構造分析」の方法に依拠しつつ、生活過程を含む社会的協業、協働形態の変動分析の視

点を提示してきた。村落共同体なきあとの村落を、単なる「共同体」の崩壊としてのみ、とりおさえるのではなく、そこには支配と被支配の二つの側面をもつた協働形態が含まれていることを実証的に明らかにしてきた。」の作業は、村落の地域共同社会を展望することは勿論、基底には社会構成体の移行の問題を包含するものであった。さて、私たちの方法論提起をも含めて、村研の課題は何か。村研の大会での私の一つの印象は、中村吉治先生が出席なされた時、都市の団地社会が話題となり、先生が「そこでの共同体が明らかになつた時、私の研究は完了する」という趣旨のことを述べられたことを思いおこします。結局、都市、農村を問わず、資本主義の発達とともになつて生産・労働・生活諸過程に形成される社会的協業・協働形態のなかで、人々が如何なる「共同意思」を有するか不明確なままである。一方で、市民的自由の範囲の個人の発達が促され、にされている。一方で、市民的自由の範囲の個人の発達が促され、「共同意思」そのものが崩壊しつつある現象も進行している。この点の解明が不明確であるが故に、再編された「地域主義論」が一つの魅力として徘徊し始めている。蓮見音彦氏は「地域主義がそれぞれの地域の自律性・独自性を主張しようとする場合、その自律性や独自性は、政治的・行政的・経済的・文化的等々の広い意味での社会的なそれであつて、自然なそれではない」。「地域主義というのは今日の社会の多くの症候に効く万能薬だとは考えにくうことになつてゐる」とし、地域分権的な民主的構造の重要性を肯定しつつも、今日の地域主義論に論理の飛躍があることを指摘している（「社会

主義」についての蓮見氏の見解に基本的に賛同するものであるが、地方社会では、自然的共同意思が現実的な力をもつてることも見逃すことはできない。それは、保守主義のイデオロギー的基底をなし、しかもそれが中央政治との結合をもなしてゐる。今日の地方社会の社会計画は、多くがこの中央政治と地域主義との結合の上になりたつてゐる。かくなる共同意思を村落共同体のムラの精神の延長のうえに、どのように位置づけるか検討の対象としなければならない。

今一つの論点は、近年、さかんにいわれる地域農業論と村落研究の関連である。昨年、欠席してしまった村研大会の「農村計画」でも討論されたことと思われる、農政が推進する各種の構造政策は、その狙いは資本の強蓄積の遂行のための政策体系の一環としてあることは当然であるが、同時に、そこから生れる協業・協働形態は、「農民的生産力」の基礎となる可能性を有している。ここに、地域共同社会の展望の基礎的形態をみることができる。従つて、各種の協業・協働形態の実証分析が数多く試みられてきたが、そこに農民の主体的対応の側面と資本主義的制約の側面を厳密に区分する分析が必要であろう。

最後に、「通信一二六号」のアンケート報告に外国との比較研究の必要を唱える方がいたが、特に社会主義農村社会についての研究が望まれる。折から中国は人民公社の廃止を打ち出し、ボーランドでも農民の動きは活発である。土地の社会化を通じて、どのような「社会主義共同体」を作り、又失敗しているかおおいに関心をもつ

ところである。

北海道農業は、今、水田と酪農の生産調整と低価格で正に危機に瀕している。昨年末、近在の湧別町調査に入った時、酪農家は、話しをしているうちに頭がだんだんさがつてきて、声も出なくなってしまった。全く展望が見えないのである。こうした現状にこたえ得る地域農業と農村社会の再構成のための理論が展開できる村研三〇回大会を期待したい。

### ムラ研究のパラダイム変化

高木正朗

この研究会が、三十年近くの歳月をかけて追求してきた課題をみると、そこには戦後から今日にかけてイエ・ムラ、あるいは農村地域社会が直面してきた問題にたいして、何らかの回答を出そうとする強い意欲をもち続けてきたことが感じられる。その限りでは、都市と農村の一体的把握のもとに農業・農村の問題を考えていこうとする研究会の将来には、期待すべき役割が留保されていると思う。

以上を前提として、農村研究の現状にたいして批判を承知の私見を述べさせてもらえば、今日の農村が直面している深刻な状況に対して、近代化論（生産関係・生産組織・金融などの）や構造・機能論（イエ・ムラ・地域権力などの）のみでは十分に対処できないのではないか、ということである。こうした確信をヨリ強める契機に

なった私の、全く私的な二つの経験を以下にのべさせていただきとて、実行委員会のご要請に応えたいと思う。

昭和五六年の八月は、前年の東北地方の冷害を忘れさせる暑い毎日だった。近世戸籍史料を求めて旧家の土蔵の文書整理をしたり撮影する仕事を一週間ほどづけ、その日に一応の区切りがついて仙台にもどる途中だった。高速道路を利用するか寄り道をするかで、私はさんざん躊躇したあげく思い切って岩手県南日町の○さんを訪ねることにした。

○さんは長男ではないが、敗戦ののち地主としての地位（農務局、大正十三年調査では、田畠六十三町歩、関係小作人百二十人）を喪失した〇家に戻つて初めて、農業を修得して、いまは三町歩の水田を経営する専業農家である。元文二（一七三七）年から明治三（一八七〇）年までの〇さんの史料は五五年の暮に撮影させてもらつていて、その限りではあえて再訪する必要はなかつた。しかし、その前後から〇さんとその家族にひどく心が引かれるものがあり続け、ムラの理解のためにそれを忘れないように確認しておく必要を感じて、意を決したのである。〇さんは、史料撮影を非常にていねいに固辞されつづけたため、私たちは世間ばなしのなかで〇さんが話したムラと行政、自らの農法や家族生活にたいする信念ともいうべき多くの話、やさしい眼で一つ一つ「無知」な私たち（都会人）、にみふくめるように話された中身を、史料にとらわれすぎていて、いつも上の空で聞いていて私自身申しわけなく思つていたのである。再訪がおつくうだつた理由もそこにあつた。

そして、○さんの話は「常識」にどっぷりとつかつた私たちには難所だった。「農業所得は現金ばかりでない」「工農団地は兼業化をつうじて、若者の離農を強める」「水田は最もよい土地だ。なぜなら水で守られていて侵蝕されることがないから」等々。○さんは区長であるが、行政にとって煙たい存在であることは、教育長さんの態度でもわかった。私の○さんの印象は、部落とその家族を把握し住民から信頼をうけたムラオサであり、農家として生産（味噌や肥料などの自給部分を意識的にのこ）しつつ社会と政治の仕組みを透視している重たい存在である。私は○さんのなかに、近代以前から脈々と流れる一つの人間類型のようなものが見出されてならないのである。○さんの家を辞したのち、私の頭はふたたび「常識」に引きもどされ、洗い流されたはずの眼にまたウロコが再生されそうである。

本年の三月中旬、ある報徳社の幕末から現在までの史料をみせてもらうため掛川へ出かけた。折を見て村の背後の標高五百米ほどの山にのぼってみた。途中にはかなり高所まで茶畠が造成されていて、棚田が我われに与えるのと同様の感動を私はかんじた。フトみると畑の際に立札があつて「○○ハチを獲らないで」と記してある。このハチは茶をあらす害虫の天敵であるという。

翌日、K財産区のMさんと茶の話をすると、お茶も今日の農産物が直面している課題から自由ではないということ、そして、これまで木材と米を奪われ、お茶まで危機にむかいつつあるこの旧村の将来に、若者に強い危機感がうみ出されていることを知った。

Mさんは、在来茶は消費者の味覚の変化で価格がさがり、品種モノ（ヤブキタ）の値段に及ばず昨年の販売金額は肥料代そこそことだと、嘆息と自嘲をこめて語った。Mさんは隣接地区のように品種モノへの改植が必要だと語りたげだが、それは病虫害に殊に弱く（サニシキ・コシヒカリなどのように）、それだけ農業と肥料と労働力の多投にむすびつくので、収支があうまでは大変だと思うと私はいった。お茶の残留農薬への規制には、県や農協が関わっているが、生産農家にとつては頭痛のタネである。

生産、流通、消費過程のなかでお茶を考えるとき、アラ茶生産農家又は生産組合は農協よりも伝統的商人（製茶業者）を媒介として都市消費者と結合しており、消費者の嗜好が小売商や製茶業者に集約されて、特定の地域やムラの茶栽培とアラ茶生産を保証してきたのである。この関係が、消費者の無農薬商品の選好のたかまり、製茶業者が把握していた消費者の流動化によるそこからの嗜好のファードバック環の切断、米飯食文化の衰退と需要の一般的減退などによって、大きく崩れてきたという。茶の味覚を決定する水質を都市上水道に求めることも困難であるから、茶の味が人工的に統制されできているのである。

結局、植物としての茶への配慮を欠いた略奪的な刈取り（一番茶・四番茶）や団地栽培方式が、病虫害への抵抗力を弱め、薬剤散布の増大、労働力の多投、農薬規制の増大と需要減少、そして収入減へと結びついていくのである。業者によつては、K地区のお茶は在来種のままで結構おいしいといって買付けるものもあり、こうした

一見「前近代的」とみえる関係を大事にし、日先の利益を成めて产地としての信用を不斷に形成していくしか良い方法はなかろう、というのがMさんと私の結論でもあった。そして、農協も生産財を売りつつ農家に生産物の質に過大な要求を課すばかりでなく、都市の消費者にむかって農業の現状を「教育」し、工業製品の延長線上で農産物を評価することのないよう、声高に主張すべき時が来ているのではないかとも話しあつた。

さて、農業・農村をとりまくこうした課題は、研究会の人々には既に自明のことであると思う。事実、二四回大会の島崎報告、二五回大会の岩崎報告そして二八回大会の谷口報告などには、右のようないくつかの問題意識も含まれているといえよう。したがつて、この小論は農村金融を中心に近代化論的視点でしか農村を見てこなかつた筆者みずからへの、自戒以外の意味をもたないかもしれない。

(一九八二年三月二十四日)

◎ 仙台での記念講演会は次のようになりました。

日 時 一〇月一六日(土) 午後二時より

会 場 東北大学文教大講義室

会次第 挨拶 記念行事実行委員長

柿崎京一

司会 田原音和

講演 竹内利美

綿谷赳夫